
悪魔をやっつけろ！

アルティメットオレンジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔をやつつける！

【Nコード】

N1914P

【作者名】

アルティメットオレンジ

【あらすじ】

地球は悪魔に征服される。運よく生き残った主人公・達也。その旅には、仲間との出会い、苦しみ、壮絶な死闘が待ち構えていた。

彼は地球を取り戻せるのだろうか……。恋愛なし、王道ドラクエ風冒険ファンタジー！一緒に冒険してみませんか？

ブローグ

いかにも真面目そうな感じの男が、コツコツと夜道を歩いている。その疲れ切った表情から、上司に罵られこき使われる日々を送っているのだろうと、容易に想像できる。

男は街の喧騒を忍ぶ、一本の路地へと入って行く。

ごみが散乱し、汚臭漂う道を少し行くと、ピカピカ光る看板があった。

「お、いらっしやい。」

男は会社帰りにこうして珍物を眺める事を、日々の救いとしていた。

「掘り出し物とかって、ありますか？」

店主はパンツと手を叩いて、とっておきがあると言い放つ。

「おー、綺麗な壺ですね。」

一介のサラリーマンがこうしてこの壺に出会うまでには、歴史がある。

それはさかのぼる事1000年前…。

緑生い茂るのどかな野山には、爽やかな川が流れている。

そこに、ゆらゆらと壺が流れ、それを偶然見つけた猿が拾った。

猿は珍しがって、そして巢へと持ち帰った。

大切にしていたが、ある日神聖なる鳥、フェニックスがそれを奪い取った。

フェニックスが寝ながら飛んでいる内にその壺は都会の中に落とされ、そしてそれをペテン師が拾い、物好きが集まるこの骨董屋（こつどうや）に高く売り飛ばしたのだ。

「まいどありー。」

鈴の音とともに、男は壺を抱えて出てきた。
そして、ご満悦な表情でスキップをしている。

「なんといつても、天空から舞い降りた神からの贈り物らしいからなあ。久々にいい買い物がで」

男に尻もちをつかせたのは、いかにもチャラそうな身なりの男3人組みだった。

「おっさんどこ見て歩いてんだよ。」
「いてー、肩やられたかも。」

一人が男の胸倉（むなぐら）を掴み、頬を殴打した。

「あぁっ……!!」

壺は腕を離れ、回転してそして、

「バリンッ。」

勢いよく破裂したかと思うと、一瞬にして黒い煙があたりをのみこむ。

そこから翼が生えた者やしっぽが生えた者達が次々と現れ、そして漆黒の帳へと羽ばたいていった。

1話 達也とその家族

「えー、約1000年前に謎の化け物達は地上に降り立ったと言われています。えー、人々は絶望状態の中ある一人の男が登場します。えー…」

澄み切った青空に、僕は吸い込まれるように見とれていた。

教台で先生がせかせかと黒板に書きなぐる音。

グラウンドからはドッジボールをする生徒達の声。

ずっと向こうの方にはフェニックスがぶかぶかと空に浮いている。

そして上空からすごい勢いでこちらに突進してくる何かがあった。

ふう、穏やかな午後だなあ。

…ってええ！？ 何アレ！！

その瞬間、ガラスが割れる音と共に、ものすごい衝動が僕を襲った。

クラス中がざわめいて、皆が僕の周りに集まってきた。

「ほーら、ガラスが落ちてるから下がって下がって。」

するとそれを掻き分けて、先生がやってきた。

「大丈夫か？」

「あ、はい、ちょっと切りましたけど…。」

先生は尻もちをついていた僕の懐ふところの茶色い物体を引き剥がした。

「んっ、コレは！」

「かわいいっ。」

女子達の黄色い声が飛び交う。

先生は謎の岩を突き出した。

それは岩じゃなく生き物で、気を失っているようだった。

「達也！お前を今日からこの茶色い物体の世話係として任命する！」

「はあああ！？」

こうして僕とコイツは出会った。

これが、波乱万丈に満ちた冒険の旅の始まりだった。

オレンジ色を帯びた、放課後の帰路。

（ふう、とんだ災難だよ。母さんに何て言おうか…。）

茶色い物体は達也の腕の中で安らかに眠っていた。

「ただいまー。」

「おかえ…。」

母さんは台所から振り返ったとたん、僕が抱えているものをじっと見つめてきた。

「母さん、コレはね…。」

「あんた何拾って来たの？猫？犬？」

「いやこれは猫でも犬でもなくて、」

「なんなの？」

えー、なんなのって聞かれても…。

「僕にも分らないよ。とりあえず詳しい事は後ででっ。」

達也は階段を駆け上る。

「あ、そう。まあいいけど問題は起こさないでよね。」

ふう、僕の母さんは優しくて良かったよ。

どこかの家だったら『すぐに捨ててきなさい』なんて言われてるとこだよ。

達也は上がってすぐ横の自分の部屋に入った。

「おまえは、ここでしばらく寝てて。あ、あとお水持ってくる。」

達也は部屋をあとにした。

母親が夕食をつくり終わり、達也がお風呂から出た頃ぐらいに、父親は帰って来た。

父親の名前は 幸之助^{いさすけ}。ちなみに母は彩。

「ただいまー。」

「あら、今日は早いのね。」

「父さんおかえりー。」

「ただいま。」

父親はにっこりと笑った。

そしてネクタイを緩めながらゆっくりと席に着いた。

「父さん、今日学校の帰りにねえ。」

「この子ったら茶色の・・・。」

「母さんは黙っててよ。」

達也は学校で起こった事を全て話した。

そしてにぎやかな会話は続いた。

「よし、もうあいつもよく眠っただろうし、父さんにも見せてあげるよ。」

達也はそそくさと階段を駆け上る。

10秒もしない内にテーブルに戻って来ると、にこにこしながら抱いているものを見せた。

茶色い物体は大人二人にまじまじと見られて、キョトンとしていた。

「そつだ、お前もお腹が減っただろ。」

そう言う達也は漫画によく出てくるような骨付き肉を差し出した。だけれどそいつはぶいと首を横に振ってしまった。

じゃあ、これはと達也は海草サラダを突き出す。

だけど、一度匂いを嗅いだだけで終わってしまった。

「参ったなあ、もうないんだけど・・・あつ。」

達也は食べ残していたシチューを口の方へ持っていた。すると、首をのばして器をのぞき、匂いを嗅いだ。

もう一度嗅いだ。

そして、茶色い物体は勢いよくシチューにむしゃぶりついたのだった。

「おおー、おまえシチューなら食べるんだー。」

達也も母親も父親も、おいしそうに食べてくれたもんだから、嬉しくなった。

「ああ、そうだ！お前の名前はシチューが好きだからシチだ！今日からお前はシチだ！」

「シチ。僕が仕事で帰ってきた時は癒しておくれよ。」

「シチちゃん、家の手伝い、よろしくね。」

こうして茶色い物体は達也の命名によって「シチ」と名付けられた。そして達也たちは楽しく家族団らんの時を過ごした。

すぐそこまで魔の手が忍び寄っている事にも気付かずに・・・。

1話 達也とその家族（後書き）

こんにちわ。長編を初めて書いてみました。

今までは長編は途中で投げ出していました。今回は最後までやって、おもしろいものをかきたいと思っています。

ペースは自分のペースでやっていきたいと思います。宜しく願います。

改善点、悪い点、感想、いい点、なんでも結構ですので書いてもらえたら嬉しいです。

2話 悪魔の鳥 ガーゴイル

時計の針が12を指す。

達也達家族は時間も忘れて話し合っていた。

「わっはっはっは！それは愉快愉快。」

「あなた飲みす、ヒック・ぎですよ、ヒック。」

「ふぁゝあ、もう僕寝るよ。行こう、シチ。」
そう言つて達也はシチと部屋に入つてゆく。

「……………」
「……………」

しーんとした空気が二人を包む。
テーブルを挟んで見つめあう二人。

幸之助は急に照れくさくなつて視線をずらした。
すると彩の方は、テーブル上の幸之助の手に自分の手を重ねる。

「あなた、もう達也は寝たんですから……………」

「おまえ……………」

今度は大人な空気が二人を包んでゆく。

「キスしようか。」

「うふ、何年ぶりかしら。」

二人はだんだんと唇の距離を縮めていく。
そして……。

「いくよつ。」

「きてっ！」

「ガッシャン!!」

突然大きな音をたてて扉が倒れた。

幸之助が振り向くと、そこには得体の知れない化け物が立っていた。
翼を丸め、頭に生えた一本の尖った角、そして体は真っ黒で、口は
だけ黄色だ。

「だ、だれだあっ！」

「ん、私？^{わたくし}私は、ガーゴイルっていう者で、あなた達に用があつて来ました。お取り込み中の所すみませんでしたね。おりこうさんにしていれば傷つけたりはしません。いいですね？」

「お、おのれ怪物め！そう簡単にいったまるかー！」

幸之助はガーゴイルの顔めがけて殴りかかる。
だがガーゴイルにはひょいっと首を右に振られ、よけられてしまった。

「おつと危ない……。」

するとガーゴイルは、目にも止まらぬスピードでこぴんを繰り出した。

「ぬおおおつ！」

バタツ・・・。

「きゃあー！あなた！」

彩は倒れた幸之助のそばに膝をつく。

「むふふ、どうですか。これで私の強さは分かって頂けましたね。見えなかったでしょうが、実はさっきのでこぴんも、ひと振りのモーションで200回も攻撃を当てていたのです。」

彩は気が抜けたかのようにうつむいている。

「あら、抵抗しないのですか。ま、賢い選択でしょう。」

さらにガーゴイルは彩の肩に手を置き、続ける。

「そんなに悲しむ事はありません。すぐにあなたも・・・。」
ぶしゅううう。

なんと彩は持っていたくだものナイフで、ガーゴイルの眼を刺したのであった。

「イ、イタイツ、イイタアアイイイイー！」

「ひっかかったわね・・・。」

そして彩はもう一つの眼も刺そうとした。

パシッ。

だがその攻撃はあっけなく阻止されてしまう。

「ふうう・・・、ふう、やってくれますねえ。」

ガーゴイルは血を垂らしながらふらふらと彩の方へ近づいてゆく。すると、ガーゴイルの手元が動いたかと思えば、もうすでに彩はでこぴんを当てられていた。

そして、倒れゆく彩の背中にすばやく回って体を支える。

（ふう・・・、まさか私がこんな人間に手こずるとは。）

ガーゴイルは幸之助の体も担いで、バサッと羽を広げると、またたくまに漆黒の夜空へと羽ばたいていった。

すやすや眠る達也とシチを置いて・・・。

3話 夜明け

ぴよぴよと小鳥が鳴いて、半開きのカーテンからは木漏れ日が差し
ている。

達也の部屋には、使わなくなったおもちゃがにぎゅうぎゅうに詰ま
って入ってる箱や、ボロボロのサッカーボールなどが整理されて棚
に置いてある。

壁にはサッカー選手の写真のポスターが貼っていた。
よほどサッカーが好きなのだろう。

棚以外で置いてある物は、机と二段ベッド。

「チリリリンー!!」

「ん・・・ぷはぁーっ！よく寝たっ！」

達也は跳ね上がった頭のまま、ベッドから飛び降りた。

「おうシチ、おはよう。僕は先に降りとくからね。」

シチは小さな毛布から顔を出して、眠そうに目を擦っている。

「ん、二人ともいないなあ。休みのはずなんだけど・・・。」

達也は牛乳を注ぎながら部屋を見渡す。

テーブルには昨日のシチューがまだ残っている。

「お、ラッキー。これ食べよ。」

達也はリモコンを手にとって、椅子に座りながらテレビをつけた。

「今日のビリは、さそり座！大事な所で慌ててしまい大ピンチ！ラッキーアイテムは、鍋のふた！」

ええー、ビリかよー。そりゃあないよなあ、朝っぱらから。

達也は少し不満げな顔で、シチューをついでいる。
するとシチが階段から降りてきた。

「よお、シチ。お前も食うだろ？シチュー。」

シチは階段をおりやいなや、そそくさとトイレに入ってしまった。

「ふんっ、なんだい。」

「ええ、続けてニュースをお伝えします・・・。」

じょーーーっ。

シチはトイレから出ると、ソファにぴよこりと腰をかけた。

目を少し開けてテレビを眺めていて、どうやらまだ眠気が取れていないようだ。

「シチ、いらないの？」

達也はさっきより少し強く言う。

シチはゆっくりと達也の方を向いて、少しの間見つめ合つと、また

ゆっくりと元の視線に戻した。

「あーはい、そうですか。あ、それと僕占いがビリでちょっと気がたつてゐるからね。気をつけてよ。」

「・・・ています。ええ、昨日から出沒しています、謎の怪物により、世界各地で被害が出ています。」

「つぶつ！」

達也は吐き出しそうになった口元を急いで押さえる。

「目撃証言では、剣を持っていた、赤い目、翼が生えていた、など他にも多数の情報が寄せられていて・・・。」

「・・・。」

沈黙が部屋を包んだ。

「無差別に地域は狙われており、一部の町や村では住人全員が行方不明になっています。」

政府はこれに対し、国民に一時的に外出禁止命令を出した模様です。

「

「・・・くく、くくく。」

笑いを堪えながら達也は嘲笑うかのように言い放った。

「ははは、シチ、聞いた？世界中に怪物だつてさ、怪物。」

シチは首を横にかしげて達也を見ている。

「世界もいよいよSFの世界みたいになるのかなあ？僕一度エイリ

アンに会って見たかったんだよねー。」

達也は好奇心満々に席を立ててコートを羽織りだした。

シチはその動きに釣られ、腰を上げて達也の方を見る。

「シチ、外でよっか。」

そういつて達也は勢いよくドアを開けていく。

シチも慌てて達也の後を追った。

翼が生えた者達が、次々と行列を作りながら洞窟へと入ってゆく。

「うむ、これだけか？」

「いやあ、いくら私たち悪魔といえども、さすがに一晩で世界中の人間は・・・」

一人の悪魔が手をこねこねさせながら言った。

「ええい、やかましい！貴様のいい訳なんぞ聞きたくないわい、こうしてやる！」

サタンはその者に対して掌をのち広げると、まばゆい閃光を放った。

「ウギヤアアア！」

と叫び声をあげ、体をのけぞらせる悪魔。

「ふん、50人も軍のリーダーでありながらなんてぎまだ。まあ明日の夜までになんとか揃えれば許してやろう。明日の夜はそれを

祝してパーティーを開くのだからな。」

「はあ・・・。」

さっきの光線で少し焦げかかった姿の騎士はひざまずいて言った。

「たのんだぞ、マルクス。」

そしてサタンはにたりと笑みをこぼした・・・。

3話

夜明け（後書き）

4話 悪魔と遭遇！？

「うーん、武田さんともいないや。皆どこにいったんだ？」

どこの家もだれ一人いなかった。

町の家の様子はいつもと同じだが、町の雰囲気はどこか閑散として
いる。

「まあでも、せつかくの休日だしさ、シチどっか行きたい所ある？」

それを聞いてシチはタタタと走り出した。

「おつ、置いてくなつてばー。」

タタタタ。

「おーい、道路は気をつけて渡れよーっ。」

と言っても、この町にはもう車が通る気配なんて一つも無かった。

「はは・・・はあはあ、お前って案外走るの速いんだね・・・。」

いつのまにか達也達は公園に着いていた。

だが公園といってもブランコとベンチしかない、質素な公園である。

きーこーきーこー。

「はは、ブランコに乗りたかったのかい。僕はちょっと疲れたから
ベンチで寝とくよ。」

シチはくりんとしたまあるい黒い目をしていて、いつも一定のあどけない表情を保っている。

その内シチは立ちこぎを始め、短い脚を目一杯のびまげさせた。

「ねえ、シチは母さんとかいるの？友達は？」

達也は目をつむって、ベンチの上で横になりながら喋った。

きーこー、きーこー。

シチはあどけない表情のままブランコをこぎつづける。

「じゃあー、君はなんなの？なんていう生き物なの？」

朝の薄暗さが消え、だんだんと暖かい光が差し込んでいる。

しばらくたつても、達也の質問攻めは続いていた。

「んじゃあ、ここの公園が「ブランコ公園」ていうのは知ってる？何故ならブランコとベンチしか無いからだよ？」

きーこーこーこー、きーこーこーこー。

達也が20個くらい質問した頃には、シチはすごい勢いでブランコを漕いでいた。

鎖はきゅっ、きゅっ鳴り、大きく幅を増して揺れている。

「んー、まいいやー！僕も休んだし、シチもブランコこいだし、今度

は僕の好きな所ついてきてよ。」

シチが一番高い地点からシュタツと着地すると、すぐに達也を追いかけて行った。

ラーメン屋さんの横を通り、雑貨屋さんの横も通って、何も無い道を真っすぐ行った所にそれはあった。

「へへ、やつと着いたね。」

達也は入ってすぐに棚にある物をチェックし始めた。指を棚に向けて上の方からゆっくりと下に下ろしてゆく。

「あ、シチもなんか選んでいいよ。ここは、本もDVDもCDも何でもレンタルできるんだ。といっても人がいないこの町じゃ無料だけだね。」

そう言われると、シチはてくてくDVDコーナーへと入っていった。

「あっ、あったー。この巻見逃してたんだよね。」
「と言って、達也は熱心にその本を読みだした。」

そしてどんどんページをめくってゆき、次々に新しいコミックを取り出してゆく。

「wwバカじゃんコイツ！wwギヤハハハ。」

達也はすっかり夢中になっていた。

ガタンッ！

突然何かが落ちる音がし、達也はその方向へと急いだ。

「シチ！だいじょ．．．。」

目の前にはシチともう一人の化け物がいた。

そいつはひよろひよると蛇の^{へび}体をしており、蛇よりもだいぶ幅は太く、目玉が一つ、細くて赤い舌はまんま蛇のものだ。

「いやいや、おりゃあ悪くねえぞ。この茶色いむくむく野郎が脅かしてきてよ?。」

果たしていったいこいつは．．．????

5話 泥棒リゲル

「ええつと・・・。」

達也はその姿を見て、言葉を詰まらせる。

「君は何者なんだい。」

「俺？おりゃあ、あく・・・、お。」

そいつは何かを見つけたかのように一か所を見つめた。

「あく・・・？」

パシッイツ。

「おめえさん、いいもんもってはん！俺もこの漫画みたかったんですわー、ほな。」

達也の持っていた漫画を奪い取ると、そそくさと店内から出て行った。

「あ、あいつ！あれは一卷しかここには置いてないのにーっ！」
達也はシチの手をむんずと掴み、全速力で走ってゆくのだった。

「うおおおおお。」

唸り声を上げつつを徐々に距離を縮めてゆく。

だが蛇の方のスピードも伊達^{だて}ではなかった。

「へーっ、まあおめえさんも中々のスピードだけんな、やつぱし野生の強さには勝てまい。」

すると今まで以上にグンとスピードが上がって、また元の間隔になったしまった。

「ちきしょー、なんか不思議な呪文とか使えないか？シチ？」

シチは達也の腕にぶらさがった状態で、ただぶわんぶわんと上下に揺られていた。

「むう・・・、これは諦めるしか・・・。」

そういいかけた瞬間、達也はハッとなった。

シュタタタ。

「ん、どうやらあいつが見えない程遠くに来ちまつたらしいな、それか諦めて帰ってしまったのかな。」

蛇の化け物はそう言うのと、走るのをやめ、くつろいで本を読み始める。

「やつぱ幸せは勝ち取るもんやなー。」

そうしていると、どこからともなく音がしてきた。

「シユドドドドドーッ！」

蛇の化け物は本を読むのをやめ、発信源を探す。

そして前方を見ると、そこには猛スピードで走ってくる達也がいた。

「なっ、なにいいっ!?!」

急いで走り出そうとするが、すぐそこまで達也が来ていた。

「先回り作戦、成功っ！」

達也は思いつきり手を広げる。

2人共その瞬間は地に足を着けずにジャンプしていた。

化け物の方は必死な表情で口に本を加えている。

ガシッ！

ゴロゴロゴロゴロッ・・・。

達也は化け物の体をしっかりと挟むと背中の方から回転するようにしてグルグルと転んだ。

「あいててて・・・。」

達也はお尻の砂を払うと、仁王立ちして言った。

「あいててて・・・じゃないよ！さあ本を返してもらおうか。」

今度は逃がさぬよう、両手で掴んで持ち上げた。

「あー、もうなんかごめんなさい！僕が間違っていましたわー。本は返すから許して〜。」

蛇の化け物は体をブンブンと横に振って暴れた。

「まったく、僕が優しかった事に感謝するんだぞ。そして本を置いたらさっさとどっかいくんだね。」

蛇の化け物はそーっと地面に下ろされる。

「あのお、本は返しますから、あつしにも見せてくれやせんかね・
」

達也は遠慮がちにそう言われると、とても断ることは出来なかった・
。

一行は場所を変え、海が見えるはらっぱの丘に来ていた。

達也は大の字になって寝そべり、シチはぐっすり眠って、もう一人はひたすらに本を読んでいた。

「つぶ！wwぎゃあはっ。」

「そんなに面白い？」

「面白いもなにも、それはあんさんがよくご存じでしょうに。っ
ぷ！wwぎゃあはあ。」

辺りには涼しい風が吹いている。

「はあゝ、気持ちいい……。」

達也の前髪が、なびいて踊っている。

（昨日の夜は楽しかったなあ。今日は父さんと久しぶりにキャッチ
ボールしたかったんだけど……。）

「ふうー、もう読み終わってしまった。」

「なんで皆いなくなっちゃったんだろ。」

「へ？」

あつ、しまった。気づいたら何か喋ってしまった。

「あー、その事ならあつしが知ってます。」

「え！？」

達也はすばやく反応する。

「もうしおくれやしたが、あつしはリゲルといいます。で話は戻りますが、その昔……。」
リゲルは説明を続けた。

「ええ！？悪魔が人間に復讐だつて！？……は、はは、ははは！そんなのある訳ないよ！」
反抗して食って掛かる達也をよそに、説明は続く。

「それがその復讐の内容は聞かされてないんですが、なんでも悪魔達が全てを支配する帝国を築くとか……。ちなみにわいもその悪魔の一人です……。」

「ぎよええっ！」

達也は驚いて上半身だけ起こすと少しだけ後ろに後ずさった。
寝ていたシチも起きてしまった。

（つこ、こいつが悪魔だつて！？って事は僕はここで……。）

「ははは、大丈夫ですよお。なんせこのリゲル、サタンの考えがあまり正しいとは思っていません。だってこんな面白い漫画を書く種族を消すなんてもったいじゃありませんか。」

「あ、あはは。そ、そうなんだ、それなら良かった。」

「それにしてもあんさん、優しいでやんすね。漫画盗まれたつてえのに。」

「そ、そうかな。」

（リゲルの説明で行くとシチも悪魔ということになるのだろうか。町の異様な静けさと悪魔の復讐。母さん達は悪魔たちに連れ去られたのかもしれない。）

その頃、サタン達しもべは着々と作業を進めていた。物語の歯車は徐々に回り始めてゆく……。

6話 悪魔化する人類

外はすっかり暗くなって、少し冷たい空気が漂っている。

都会の街や、その繁華街でさえ、人がいる気配を見せない。

だが陸から少し離れた所にある、島の上のほら穴からは、にぎやかな声が聞こえていた。

「あ、そーれ。あ、そーれえ。」

洞窟の中ではどすの利いた声がいき交っている。

天井には何本もの細長いつらら石、そして華やかなシャンデリアがつるされている。

白いシートが被せられた丸いテーブルが点々と置かれていて、奥には赤いカーペットがあり、

その先には王様が座するような椅子に一人の悪魔が腰かけていた。

「ぬあっはっは、躍るがよい、躍るがよい。」

「サタン様、世界中の人間を集め終わりました。」

ひざまずいて言う騎士の姿をした悪魔の後ろには、たくさんの人間達がいる。

「おおっ、マルクスよくやったな、顔を上げていいぞ。さあて・・・」

ざわざわざわざわ。

「なんのつもりだー！」

「こ、ここは一体・・・。」

慌てて周りを見渡す者、大声で声を上げる者、ひそひそ話をする者などで辺りは埋め尽くされている。

「静まれー！今からサタン様が大事なお話をするからよく聞いておけ！」

剣を持った方の手を上げてマルクスが言った。

「ああ？なんだてめえ。おもちゃのコスチュームなつて着やがつてよお！」

すると、いかにもという感じのいかつい男がマルクスに飛びかかった。

パチッ！

微かに音が響く。

「なつ、なにっ・・・！」

男のこぶしはがっしりと掴まれていた。

「相手の強さくらい見極めないとな。」

そう言つてマルクスは男を投げ飛ばす。

「やあ、やあ人間の皆さんこんばんわ。実は今日はあなた達に復讐

をするためここに集まってもらいました。」
サタンの話が始まったようだ。

ざわざわ。

「なっ、なんだって。復讐だって？」

「ですが気が済むまで殴ったり火であぶったりだとか……。そんな大それた事は致^{いた}しません。ただ……。」

少し間^まを入れて、また続ける。

「ただ殺すのはつまらないから私の家来にしてやろうという事です。」

辺りは急にざわつき、人間達は冷静さを失って戸惑い始める。

「出口っ、出口はどこ!？」

「だれが家来なんかに!」

「安心しなさい、すぐにお前たちも悪魔のすばらしさに気付くであらう!」

と言ってサタンは手から、紫色のギザギザした光線を放った。それは素早く人間達を包みこんでいく。

「ぐおおおおっ!」

「きゃああーっ。」

次々と倒れていく人ばかり。

「サタン様、これでこの世界は我ら悪魔の物ですね！」
「うむ。」

すると倒れている人間達の背中からむくむく翼が生えてゆく。
おまけに体も黒い毛に覆われてゆく。

「おお、思った以上に呪文の効き目が早かったようです・・・。」
そして一人、また一人と起き上がってきた。

「こ、この体はっ・・・。」

「ぬはは、このサタン様がお前たちを悪魔にしてやったのだ。」

「サタン様に悪魔にさせてもらい、このうえない喜び！」

人間達はさっきまでの反抗心を忘れ、純粋な悪魔になってしまったのだった。

「いいか、お前達。今日からは立派な悪魔族として生きてゆくのだぞ。」

「めでたい、めでたい。今日はがんがん飲みましょう！ささ、サタン様、万歳ばんざいの合図を・・・。」

「バンザイ、バンザイッ。」
サタンは大きく両腕を上にした。

「悪魔バンザイ！悪魔バンザイ！悪魔バンザイ！」

その後も、悪魔達の宴は続いた・・・。

7話 逃げる！

「よーしっ、出発でやんす！」

「もおゝっ、うるさい。お前だけテンションが高いんだよ。」

「いやゝっ、それにしても兄貴は優しいですねえ。盗人ぬすこな上に悪魔のあつしを仲間にするんだからあー。」

「お前があんなにお供ともさせて下さいって言うからだよ。」

三人はてくてくと商店街を歩いていった。

「うひょゝっ、たこ焼きにアイスクリーム、それにあつしの大好きな漫画屋さんまでっ！」

リゲルは目をキラキラさせてはしゃぐ。

「それもいいけど、今は一刻も早く世界を元に戻さないと。遊んでる場合じゃないよ。」

「もおゝっ、兄貴ったら堅いですねえ。ね？一回、一回だけでいいから！」

そう言ってリゲルはゲームセンターの中へと入って行った。

「あー、行っちゃった。シチ、疲れてないか？」

シチは相変わらずあどけない表情できょんとしていた。

「あのお、兄貴い・・・。」

どうやらゲームセンターからリゲルが出てきたようだ。

「遊ばうと思っただんですがお金が無くて遊べないんです・・・。」

「お金え！？お金なんて僕持ってないよ。ささ、ゲームはあきらめてしゅっぱつしんこー！」

「ちえっ・・・。」

一人は少し不機嫌気味な顔をしていたが、達也達はゲームセンターを後にした。

「おいおい、まだゲームの事を根に持ってるのか？」

「ふんっ、兄貴にはあつしの気持ちはわかりませんよ。ゲームはあつしの生きがいなのに・・・。」

「はは、おおげさだなあ。あ、そうだ、あそこのそば屋さんで休憩しようよ。」

達也達ははのれんをくぐって、がらがらつと戸を開けて入って行く。時刻もちょうどお昼であった。

「・・・したんですよ、がはははは！w」

「もー、口からそば出てるって。」

達也達はだれもない店内でにぎやかに談話だんわしていた。

「それにしてもこのそばおいしいっすね。おまけにとろろとか、ねぎタダいくらかけても無料ですし。」

「開き直り早いなあ、おまえ。」

なんか気楽なやつていいよな。はあ・・・、僕なんか喧嘩の傷ひとつつukった事ないのに、悪魔と戦うなんてさ・・・。

「あれ？兄貴には合いませんかね、コレ。」
ずるずるずるうゝつ。

のんきにそばをすすするリゲル。

「ばかいえ、僕なんか20杯はいけるぞ！」

「なにをーっ！あつしは30！」

「じゃあ僕は……。」

2人のコントのような会話は一時間くらい続いた。そして……。

「じゃエネルギー満タンってことで、出発だな。」

「へいつ！」

がらがらがらあ。

「あー、食った食った。また来ような、リゲ……。」

リゲルは動かずに、ある方向だけを見つめている。

「お、おい。どうしたリゲル。」

「な、何かが、こっちに来てるう、あれは多分……。」

達也も同じ方向を見ると、そこには不気味な化け物達が、うじゃうじゃとこちらに向かっていた。

空を飛ぶ者もいれば、道を歩いて来る者もいる。

なっ、なんだ！？あいつら、見る限りではやばそうな臭いがプンプンするぞ。

ともかく今は・・・。

「リゲル、シチ、はやくこっちにこい！」

達也は小声でそういうと、2人を引っ張ってそば屋の壁に隠れた。

シュタツ。

「よし、やっと着いたな。」

うわー、あいつやたらとがたいがいいなあ・・・。

「うふ、暑いわあん。早くキンキンに冷えたビールでも飲みたい。」

何百人もの群れは町に着くと、それぞれがあちらこちらへと散らばって行く。

「なありゲル、さっきの多分って何なんだ？」

達也達3人は壁から目をちょこつと覗かせている。

「た、多分悪魔です。」

「ええーっ！・・・っ。」

達也は慌てて口を抑えた。

「あ、あいつらは・・・。」

リゲルの顔が普段と違い、ひきつっている。

「ねえ、なんか人間の匂いがしない？わかい・・・、若い男の匂いがするわ。」

や、やばいっ・・・！結構離れているのに、何故・・・！？

「んあ、そうかあ？悪いが俺には分かん。」

女の姿をした化け物は花をクンクンさせ始めた。

「もう少し、もう少しで分かるわあ・・・。」

「リ、リゲル！シチ！ここはいったん逃げるんだ！」

「いた・・・。」

女はにたりと笑って追い始める。

「走って！これは間違いなく人間だわ！」

「あ、兄貴い！バレちゃいましたよぉー！？」

「いいから走れ！」

確かこの道の先に海があったはず！そのボートに乗れば・・・！

「いいか？お前が漫画を盗んで逃げた時みたいに全速力で走るんだ、いやそれ以上だ！」

「へ、へいつ。」

シュドドドドドドー！

「全員で3匹ね。んふ、まだ生き残りがいたなんてねえ・・・。」
「にしてもあいつら、結構なスピードだぜ・・・。」

化け物達もさらに速度を上げた。

くそお、このままじゃこっちのスタミナが切れてしまう。

達也達は、わざわざ店と店の間の細い道をつねつねと曲がってみせた。

「へっへーん、見失えさせればこっちのもんだーい。」

「あぁっ、この道を抜けりゃぁ海ですぜ！」

よし、もう少しだ！

ガシャンッ！

「ん？」

音がした方向に、達也が振り向くと、なんとシチが倒れていたのだ。横たわったゴミ箱と共に。

「シチ、大丈夫か！」

達也は慌ててダッシュする。

だが、もうすでに2人組の化け物達が、女の方を先頭に、角を曲がって道に入ってきた所であつた。

「おほほ、やっと捕まえられるわぁーっん！」

そして、勢いよく飛びかかる。

「そっちはいくかー！！！」

あと少しの所で、達也はシチの前にすべり込む。

あぁ、どうしよう。僕は今何をすればっ・・・。

達也は、一瞬の間に打開策を頭の中で展開した。

そして目の前のごみ箱からこぼれ出ている、なべのふたを手にとった。

「もうやけだーっ！」

ガアンッ！

「う、うう。よくもこの私の顔を……。」

前に突き出したふたは運良く女の顔面へとヒットした。

達也はもう半ば諦めかけつつ目を開く。

・・・お、おお！やったあ！

「おお、おい。早くどけよ！」

「うるさいわね、あんたこそはやく追いなさいよ！」

尻もちをついた女にぶつかって、後ろにいた男もこけた。

「よし、シチ！今のうちだよ！」

達也はシチの手をぎゅっと掴んで、走り出す。

ボートにはリゲルがもう乗っている。

「あんにやろー、兄貴の足引っ張りやがってえ。」

一方2人組の方は、ようやく立ち始めて走り出したようだ。

「逃がすもんですかぁー！」

よし、あとちよつとで船に乗れるっ！

「兄貴いー、速くー！」

シュドドドオオ！

後方からかつて無いスピードで迫ってきていた。

「そりゃあっ！」

女は再び達也めがけて飛びかかる。

ええええ！？や、やばいつ！そんなにジャンプされるとはあっ・・・！

「うおおおおっ・・・！」

達也は目一杯にボートめがけてダイブした。

女の細長い手が、あとほんの何ミリかで達也の足に触れようとしている。

バンッ。

「・・・はあ、はあ、・・・危なかった。」

達也とシチは船に転げ込んだ時には、すでにボートのエンジンがかかっていた。

「危なかったげすねえ！。もう少しで捕まってましたよ。」

達也達は安堵^{あんど}を感じながら、陸の方を眺めていた。

「ああん、もうっ、逃しちやっただじゃない！」

こうして3人は化け物達から逃^{のが}れる事が出来た。

ラッキーアイテムのなべのふたが達也達を救ったのだ。

8話 出会い

ボートは水しぶきをあげながら、ただただ進んでいた。

「ねえ、逃げたはいいいけど、これからどこ行くのさ。」

「そんな事あつしに聞かないでくださいよ。」

「あつそ。」

空は一面赤く染まって、水面にも赤い玉が反射している。

「ここの海はきれいだあ。」

達也は身を乗り出して覗き込む。

さつきは危なかったなあ。にしても、このふたが本当にラッキーアイテムになっちゃうなんて・・・。

「あつ、兄貴、あそこに島がありますよお！行ってみましょう。」

「そうだな、休憩もしたいし。」

ボートは白い砂辺に停まった。

「こんな所に島なんてあつたんですね。」

すると、着いた途端、いきなりシチが走り出した。

「おつ、おいこらっ！」

達也は慌ててシチを追いかける。

シチが走る方向には、なにやら建物らしき物が見えた。

シチのスピードは速く、もう建物の入口に入りかかろうとしている。

「シチー、待てつてばあ。」

だがその時、建物の中からもやたら細長い物が飛び出してきたではないか。

びゅんっ。

それはシチの体の横をギリギリでかすめた。

「シチ、大丈夫かつ！？」

地面に槍が勢いよく突き刺さった。

「ええい化け物め、私達を襲おうつたつてそうはいかないんだから！」

すると今度は、達也と同じ年くらいの女が影から現われたでわないか。

「！　まだあと2匹もいたのね、私が退治してあげるわ。」
そういつて女は戦いの構えをきめる。

「ちょちょちょ、ちょっとたんま。僕人間だよ！」

「人間に変身してもムダよ！」
達也の言うことに全く聞く耳を持たず、素早いパンチやキックを繰

り出してきた。

シュシュツ、シュシュシュツ。

に、人間！？ 人間がまだいたなんて……。くっ、にしてもこの女の子のスピード、やたらと速い……。

達也はただ後ろに後ずさってかわすしか出来なかった。

「このやろー、兄貴に何をするでげすーっ！」

リゲルが横から牙をむき出して襲いかかる。

「うるさいっ！」

ばーん！

だが、あっけなく女に吹き飛ばされてしまう。

ごすっ。

そしていつのまにか、達也の腹に女の蹴りがクリティカルヒットしていた……。

「い、いたい……。」「

「えー？ よ、よわ！ それじゃあ本当に……。」「

「こら、その方達は悪い人じゃない。わしには分かる。」「

今度は、杖をついた白髪の老婆が扉から出て来たのだった。

「ささ、その者達を部屋で休ませてやるんじゃ。」「

女は右肩にリゲル、左肩に達也を担^{かつ}いで、建物の方へと向かった。

私と同じくらいの年かしら。でも人間ならなんでこんな蛇モンスター
ーとかと一緒にいるんだろ・・・。

そして、シチも遅れて後を追っていったのだった。

「ん！？　ここはっ。」

達也はいつのまにかベッドの上にいた。

そうだ、さっき僕は確か蹴^ふられたんだ。そして倒れて・・・。
・・・リ、リゲル、シチは！・・・とりあえず部屋から出よう。

ガチャッ。

扉を開けた瞬間、おいしそうな匂^{にお}いが達也を包みこんだ。
目の前にはシチとリゲルがテーブルを囲^{かこ}んでいた。

「兄貴ー、遅いっすよー。」

「リゲル！それにシチ！」

3人は再開を喜んだ。

「あ・・・。」

「ん・・・？」

テーブルには、さっきの女も座っていた。

「あつ、ぼ、僕達は君を襲おうとしたわけじゃないんだ！それに悪魔でも・・・。」

「あの、さつきはごめん。思いつき蹴っちゃって・・・。」

「ひょえ？」

「おばあちゃんがあんた達は悪い人じゃないって言ってたんだ。だから今おばあちゃんがあなた達を歓迎して、ごちそうをつくってるわ。」

・・・ほつ。いちお僕達の疑いは晴れたんだな。良かった・・・。

「ささ、出来たよ、たんとお食べ。」

老婆が料理を持ってきた。

「こりゃあこの辺でしか取れない魚だよ。」

「うつひょーい！」

リゲルとシチは皿が置かれるやいなや、すぐさま串刺しになった焼き魚を食べ始めた。

ムシャムシャムシャ！

「もうリゲルもシチも行儀悪いってば。」

「んふ、そのかわいなお二人さんはあなたのペット？」

「ペットというか、仲間かな。旅の。」

達也も話しながら魚を手取る。

「さっきはこの子が乱暴したようで、すまなかった。じゃがこの子も両親をあのニュースとかでやっていた謎の化け物達に襲われてのう。」

「そうだったんですか。それにしても、僕達以外にも無事だった人がいるとは思いませんでしたよ。」

「この子の父親でもあり、わたしの息子でもあるレイモンは、とても強くて立派じゃった。化け物が襲って来たときも勇敢に挑んでいた。その隙にわしらは船で逃げる事ができたんじゃない。」

この子も親を……。僕は母さん達が実際に襲われていたのを見てないけど、やっぱり母さん達も……。

「ふうーっ、食った食ったーっ！」

「リゲル、ごちそうさまだろ。」

「おほほ、それはこっちも嬉しいわい。さて、もう外も暗くなりましたし、今晚は泊まって行きなさい。」

「それじゃあ、お言葉に甘えて。」

暗くなった辺りからは、ただ波の音が聞こえていた。

「ではこの部屋に3人で寝てください。それじゃおやすみ。」

バタンツ。

老婆はそう言って戸を閉めた。

「よし、飯も食ったし、風呂にも入ったし、今日はゆっくり休んで明日出発だ。」

「はい兄貴！いい夢を！」

リゲルとシチは布団の中に頭をもぐらせて、眠りに入ってしまった。

じゃ、僕もそろそろ・・・。

そして達也はライトの明かりを消し、布団を肩のどこまで被って目を閉じる。

・・・。

・・・。。

真っ暗な世界。真っ暗な暗闇の世界。

怖くなって目を開けても真っ暗。隣からはかすかな寝息が聞こえてくるだけ。

ああ、次から次に色んな事が起きて、なんか心が忙しくて落ち着か

ないや・・・。

・・・クン、ドクンドクン・・・。

心臓、心臓の音がする・・・意識すること、大きくなってしまつ。

はあ、母さん。父さん。お願いだから生きていて下さい・・・。

はあ、なんか・・・。

「あーもう！」

達也は突然叫んで上半身を起こした。

だがシチモリゲルもぐっすり眠っている。

「なんか眠れないやあ。」

達也は手でドアのぶの位置を探って、そして部屋を出て行った。

キシ、キシキシ。

はあ、寒い・・・。

達也は裸足で廊下を歩いていた。
時折廊下のきしむ音がしている。

達也は建物を出ると、海の方へと歩いて行った。

ヒューッと、冷気が達也の肌を刺す。

少しくらい歩いて波打ち際についた。

「……………」

達也はただ黙って海の向こうを見つめていた。ただじーっと。

「ん？あの子はっ。」

達也の横にはあの女の子がいた。達也の視線に、向こうも気がついたようだ。

「あら、あんたまだ起きてたのね。夜更かししてちゃダメじゃん。」

「それは君もじゃないか。何してるんだい。」

「なにつて眠れないから来てんのよ。」

「ふーんっ……」

「……ざばーっ……ざばーっ。」

「ところでこれからあんた達どうするの？あてでもあるの？」

「町に行ってももう化け物達がいっぱいいるしなあ……。でもここのんびりはしてらんないよ。」

だから見つからないように潜入して、そして悪魔達をぶったおす！」

「ふふ、冗談よしてよ。私に負けちゃうような人が倒せっこないでしょ。じゃ私寝るから。」

笑いながら彼女はそう言うと、スキップをしながら帰って行った。

ちえっ。なんだい、人をばかにして。

そして達也もとぼとぼと建物の方へと歩いて行った。

9話

ふたたび旅へ

「・・・いつ、おーいつ。起きてったら。」

「ん、んん。」

達也が気付くと、窓からは白い光がもれていた。

「まったくもー、あんた達よっぽど疲れてたんだね。おばあちゃんが朝ごはんつくったからはやく起きて来て。そしてそのかわいいペットさん達も連れて台所に来なつ。」

達也はまだ眠そうに布団から出て、着替えはじめた。

「リゲルー、シチー、悪魔が襲ってきたぞーつ。」

「ええっ!?!」

リゲルもシチも慌てて顔を出した。

「んもーうつ、脅かさないでくださいよお・・・。」

「はは、ごめんごめん。朝ごはん出来たらしいから先にいっておいで。」

そしてしばらくして達也も食卓についた。

ムシャムシャ。

ゴクゴク。

5人ともあまりしゃべらずに、ただ食べ物を噛む音や、食器を置く音だけが鳴っている。

「いやー、おいしいですねえ。おばあさんの作る朝飯は。」

その沈黙は、お気楽に話すりゲルによって破られた。

「そうかい、サラダもスープもおかわりあるからね。」

「ん、この茶色くん。さっきから何も食べてないわね。」

「ん、ほんとだ。どうやらこいつは朝ごはんは食べないらしいね。」

シチはそそくさとテーブルを後にして、外へと駆けて行った。

「ああ、もう。こんなに残して・・・。」

「いいんですよ、兄貴、あいつには好きにさせておいて。それに残った料理はあつしが食べますから。」

そしてまた皆黙ってもくもくと自分の朝食を食べ始めた。

「ふう、おばさん、ごちそうさま。それじゃあ僕達はこれから荷物を・・・。」

「ちよつと、食器くらい片付けなさい。」

女の子が食べながら口を開いた。

「ああ、ごめん。」

達也は自分の分、リゲルは自分とシチの分を頭に乗せて運んで、2階の部屋へと入って行った。

女の子はただ黙々とフォークで刺したものを次々と口へと運んでいる。

「おや、うかない顔じゃの。それにレディがそんなにバクバク食ってええのかな？」

「ほつとしてよ、おばあちゃん。私だって色々考えたりするんだから。」

「そうかい・・・。」

そしてその内に、達也達が降りてきた。

「あら、どこに行くの、遠足？」

「違うよ、また旅に出るんだ。」

（色々つつかかってくる子だ。）

「え、まさか本当に化け物を退治しに行くって言うんじゃないでしょうね!？」

女の子は驚いた顔をして席から立ち上がった。それにつられて老婆も達也の方を見た。

「僕らがやらなきゃ誰がやるんだよ。おばあさん、色々ありがとうございました。」

達也は軽くお辞儀をした。

「ちょ、やめときなよ！もうどうしようもないのよ。世界が乗っ取られたら乗っ取られたで、ここでおとなしく暮らせばいいんだって。」

「いいんじゃない、この子らに任せよう。じゃが達也、必ず、必ず、生きて帰ってくるんじゃない。危ない時は逃げるんじゃないぞ。」

「はい！」

達也とリゲルは家を出て行った。

「おばあちゃん！あの子達死んじゃうよ！？」

女の子が問いかけても、老婆は落ち着いた態度で黙っていた。

女（僕らがやらなきゃ誰がやる・・・か。）

「ふー、やっぱり朝の光は気持ちいでやんすねえっ！」

「そうだなーって、あれ。シチは・・・。」

達也が少しあたりを見回すと、海辺の所にシチがいた。

「はは、そこにいたのか。遊びはそこらへんにして、出発するぞ。」

シチは波が押し寄せたら逃げて、波が引いたら寄ってを繰り返していた。

「兄貴、エンジンはかけたでげす。はやく乗るでげすよ。」

「ん、ああ。」

遅れてシチも乗りこむと、ボートは勢い良く出発した。

だが後ろの方で呼び止める声が聞こえてくる。

達也が後ろを振り向くと、女がこちらへ走っていたのだった。

「待ちなさい！」

女の体はどんどん海に浸かっていき、腰の辺りまでそれが達した時くらいにボートに到着した。

「ふん、あんた達だけじゃ不安だから、私も一緒に行くわよ。」

「えっと、嬉しいんだけど、やっぱり女の子はキケンだよ。だから・
」

するともう一人海辺の方へと歩いてきた。

「達也殿、きつとこの子も自分の手で親を救いたいんじゃないよ。」

おばあちゃんが大声でそう言った。

女は達也の方をじっと見つめている。

（う、そんなに強い眼差^{まなび}しで見つめられたら・・・。）

「うん、分かったよ。じゃこれからよろしく。」

「ほんと！？やったー。」

女は嬉しそうにはしゃいだ。

達也はしだいに遠ざかってゆくおばあちゃんの姿を、ただじっと眺めていた。

ボートはばちゃばちゃ水しぶきをあげ、水面を裂いて進む。
女はどんどん遠くなってゆく島の方を眺めている。

4人は会話もせず、それぞれが景色を見たり、考え事をしたりしていた。

（う、うう。女の子とどう会話をしたらいいんだろ・・・）

そして先に口を開いたのは女であった。

「あ、私の名前を言ってなかったわね。私はナツキっていうの、よろしくね。」

「あ、ああ、よろしく。僕は達也。こいつはシチで、こっちが・・・」

「あつしはリゲルでげす！」

「へー、シチちゃんにリゲル君つ、仲良くしましょ！」

（ナツキちゃんか。 けっこつかわいいな・・・。）

「兄貴、お茶ください、お茶。」

達也はリュックに入った銀色の魔法瓶を、リゲルに渡した。

ゴク、ゴク。

「あー、うんまい。」

「あ、そういえばリゲル。昨日追ってきたやつの事、何か知ってないか？」

「そうそう、言うの忘れてたでげす。あいつらはいつも2人でつるんでるげす。やたらとがたいがいい方はギガントス、女の方はマリ

「。ギガントスは力任せの攻撃や、タフさに注意、マリーについては戦ったところを見たことが無いので知りません。」

更にリゲルが続ける。

「それと、何人もの悪魔の群れがいやしたが、あんなに悪魔がいるはずはないです。だって全員で50人のはずなんですから。サタンかだれかが不思議な術を使ってるのかもしれませんが。」

・・・ふむ。やっぱりあいつらは悪魔だったか。

「へー、あんた達も多少の修羅場を潜り抜けてんのねえ。」
横からナツキが割って入る。

（ま、私のほうがたくさんきつい試練を乗り越えてるんだけどね・・・）

「兄貴、あの鳥ってえ。」

ずっと向こうの方で、朱色をした一際大きい鳥が飛んでいる。

「あああれはフェニックスといって、いつも雲居から地上を見張って邪悪なものから地球を守ってるというわれてる鳥だよ。まあいまいじゃ悪魔の手下になっちゃってるかもね。」

達也達話が話している内に、ボートはだいぶ進んで、あたりは一面青いだけだった。

リゲルとシチは眠り、達也とナツキはそれぞれ違う所を展望している。

「なんかさあ、こんな広いところにポツーンといると、なんか不安になるよね。」

ナツキがソツとつぶやいた。

「ん、ああ。」

反射的に達也が相槌^{あいづち}を打つ。

（確かにこんな広い所だとサメとかなんかが出てきそ・・・。）

バシヤアアア！

突然大きな音がすれば、達也達は水しぶきを食らった。

達也が顔にかかった水を振り払って見ると、そこには長い首をした竜がいたのだった。

10話 水竜

4人は白に輝かせた顔を上げながら、啞然としていた。だがすぐに逃げなければ危ないと悟り、達也はとっさにアクセルを踏んだ。

「何なんだ!？」

急な反動で、リゲルは飛ばされる寸前で船の尻にかみついた。

ボートの軌道は海を耕すようにして描かれてゆく。

竜はただ何もせずこちらをじっと見据えていた。

「は、はは、別に悪い奴じゃなかったのかも。」

そういつて達也は3人に笑いかける。

もう一度達也が背後を見ると、そこにはもう竜の姿はなかった。

ぞつとして横に目をやると、どす黒い青色のひれが、ゆっくりと海面から姿を現し始めているではないか。

声をあげて達也は尻もちをつく。

「やあやあ皆さん。お客様は大歓迎です。なんせここら辺にはちっこい魚しかいませんからね。」

不気味なその笑みは獰猛な野生の性質をはらんでいた。

(うわあ。こ、こええ。)

達也はただそれだけを感じた。

恐怖という名のつたの葉が、次第に彼の心を侵食^{しんしょく}する。

「まったく、だらしないわねえ。」

そう言っと、ナツキは威勢よく飛びかかった。

（はは、かつこつけちゃって・・・）

「な、なにをする！」

ナツキはまたがって、次々とエルボーを浴びせていた。

（すげー、ナツキちゃん・・・）

うろたえた心は、すでに恐怖を通り越して、虚脱に陥っていた。
達也はうつろな目でぼーっと眺めている。

「あ、あの兄貴、ナツキちゃん、一人で戦ってますけどお。」

（一人、一人・・・一人！？）

達也は慌てて立ちあがって、ハンドルを掴んだ。

「今の内に逃げよう！そうだ、今のうちなら逃げれる。よし、今の・
・！」

達也はハッとした。そして卑怯な考えに取り憑かれた自分を恥じた。

「あ、兄貴？」

「はっ、ナツキちゃんが、ナツキちゃんが危ない！」

竜はうつとおしくなつて
首をブンブンと振りだした。

「てめえのエルボー地味にいてえんだよ！」

なおもナツキはしがみついて、手を止めなかった。

「うおおおお！」

竜は力いっぱい唸り声をあげて、一度高く舞ったかと思うと、激しい音に吸い込まれるようにして姿を消した。

青に染まった世界をどんどん突き抜けてゆくのが分かる。眼中の脇を、小さな魚達や、たくさんの泡が駆け抜ける。

（だめ、もう我慢できない。）

すーっと手は離されて、それから徐々に体が浮いてゆく。竜は止まる。

ナツキは一心不乱に海中をかきわけける。

白い玉は、四方八方に光のとげをのばして、頭上を照らしていた。それは、心動かす存在でだったが、そんな余裕は到底なかった。

（もうすぐ、もうすぐ。）

奥深くからは、竜の顔がむくむくと昇ってきていた。

（やばい！！！）

「プハアア！」

ナツキは目の前にいきなり手が出現していて驚いた。

すでに待ち構えていた達也達によって、ナツキは引き上げられた。

ついで息も絶え絶えナツキが言う。

「え、えーと…、あの。」

「ん、何？」

「えーと、竜が、」

「ザバアアアン。」

突然水は大爆発を起こして、嵐のような波が一同を包み込んだ。

ナツキをのぞいた三人は、今起こった事が何なのか分からなかった。そして、自分を転がす波が収まるにつれて、「竜の仕業か」と解釈できたのだった。

「ガボガボ、うへー助けて、あっしは泳げねえぜ。」

「ナツキちゃん！リゲル、シチー！」達也は懸命にぐらつく視界の中で辺りを見回した。

《達也。》

（ん、今確かに呼ばれたような…。）

先ほどの衝撃波のせいか、竜は少し離れた所に位置している。

（竜は気づいてないらしい。よし今だつ。）

達也は一旦ボートの所まで泳ぎ、それから皆を集めた。そして裏返しのボートを戻し、一人残らず乗船する。

どこだどこだと嘆く怪物を置き去りにして、ボートは旅立っていた。

「ブロロロ。」とボートは音をたてている。

だれ一人として、言葉を発しなかった。

皆、突然の出来事に度肝を抜かして、ただ放心状態に心を任せるしかなかった。

そよ風は4人の肌を心地よく冷やす。

だいたい色の光が何とも言えない哀愁を含んで広がっていた。

11話 侵入

あたりはもうすっかり暗くなっていた。
乗船場を、ひよろりと生えた街灯が照らしている。

「ふう、やっと着いた。」

「で、これからどうするの？」

あたりを眺める達也に、ナツキが問う。

「んー、分からない。」

ナツキは少しがっかりした顔で彼をみつめていた。

僕らはあてもなく、闇路を歩いている。

ふと、後ろをのぞくと、ナツキちゃんは疲れきった顔をしていた。
その瞬間、黒々とした影が心をかすめる。

（これから先やっていけるのだろうか。僕はこれからどんな化け物
と対峙しようとしてるんだ？）

僕はナツキちゃんがこちらに気づいたので、前を向き直った。

すると、

「ねえ。」

「な、何？」

「もう疲れたから、どっかで休みましょう。」

（そうだな、この辺でちょうどいい所を…。）

列の後ろからグーッという音が聞こえた。

「兄貴、その前に腹ぺこです。」

木製の扉は少し開いて、微かに光を漏らしている。

4人は離れた草の茂みに隠れて目をこらす。

「よし、今、家から出て行った。」

そして、せかせかと小走りで扉の前に皆駆け付けた。

「ねえ、やっぱやめようよ。」

「大丈夫だよ。食糧をとったらすぐ出るから。」

「ギイーツ。」

扉がゆっくり部屋の中を開け放され、白い光が彼らを出迎えた。

「こりゃ地味な部屋だ。」

それからナツキは入ってすぐの左にある棚に飛び付いた。

「んな事言ってる場合じゃないでしょ！リゲルちゃんは見張り役お願いね。」

2人はせつせとリュックに食糧をつめていく。

シチはそれをベッドにぴよこんと座って眺めていた。

「ドサッ。」

達也はびくつとして振り返る。

ドアの入り口には横たわったリゲル、そして大きな目玉から4本の手足を生やした化け物がいた。

「うわっ。」

と達也が尻もちをついた。

「てめえら何してる。」

「シュタッ。」

すぐさまナツキはとび蹴りを頭にくらわす。

「ござかしい！」

タンスにぶつ飛ぶナツキ。

「ギガントとマリーがサタン様にチクっていたのはお前らの事だったのか。」

達也（や、やばい！ 死ぬ！ 怖い！）

「ビーン。」

達也はとっさに後ずさる。

目玉から放たれた細長いビームが、達也の股ぐらを焦がした。

「よくよけたな。だが次はどうかな？」

瞬く間に一筋の光線が、達也めがけて放たれる。

達也（か、体が動かない！）

「キンッ。」

（前にいるのはナツキちゃん。）

ナツキはなべのふたを突き出していた。
化け物の方へと光線がはね返る。

「ゲギャー！」

黒焦げになった体はバタリと倒れた。

達也「はあ…、はあ、助かった。」

（化け物の背中からはプシューと煙が上がっている。）

「ギシ、ギシギシ。」

シチがベッドの上で跳ねている。

「あ、ありがと。」

ナツキは振り向いて言う。

「あんたってホント弱虫よね。」

（…よ、…弱虫。）

一同はまず悪魔を海に運んで、そして棚にあった食糧で腹を満たし、ようやく就寝の時間がやってきた。

「じゃ、私はベッドでリゲルちゃんとシチちゃんとで寝るから、あんた床で寝てね。」

「おやすみなさい、兄貴。」

明りが消える。

達也はベッドのそばで、リュックを枕にして横になっていた。

（ああ、今日は色々ありすぎた。なんだろ、今いちよく分からない。怖かった。ああ、怖かった……。）

くたくたの体は、あっという間に夢の世界へと吸い込まれていった。

12話 ブラックロープ

あたりは真っ暗で何も見えない。

（ここはどこだ。）

すると、どこからともなく声がしてきた。

「お前にこの試練が乗り越えられるかな。」
残響が響き渡る。

「お前は誰だ！」

「私はサタンだ。」

それを聞いた僕は走り出す。

「うわっ。」

目の前にはあの竜がそびえたっていた。
慌てて進路を変えると、今度は目玉の化け物が待ち構えていた。

必死にビームをよける。

「うわあああ！怖い、死にたくない！」

？「達也、達也！」

「あ、ナツキちゃん。」

気分とは反して、輝かしい光が窓から射している。

「ずっとうなされたよ。」

「昨日の悪魔が出てきたんだ。」

それからというものの、僕は朝ご飯を食べたつきり何もする事がなくなつた。

リゲルとシチは日なたぼっこ、ナツキは家の中をつろつろして、僕はベッドで考え事をする。

「これからどうする？」

「んー、うかつに外に出られないしなー。」

そしてどんどん時間が過ぎて、いつのまにか夜になった。

「ねえ、リゲルちゃん、サタンがどこにいるか分からないの？」

「あつしは蘇つた直後に群れを離れたので、どこが本拠地かは知らないんです。」

また、それぞれが自分の世界に戻る。

しばらくして沈黙を破られた。

「なんか、本当に勝てるのかな。」

達也がベッドに横になりながら言う。

「だって相手悪魔だし、勝てるきしないっていうか……。」

「とことん弱気ね。」

その時、

「キイッッ。」

今まで誰も開けようとしなかったダンスに、ナツキが近づいた。ナツキが取り出したのは、黒いローブだった。

「それだ！」

と、達也が声をあげた。

黒装束の格好をした2人が、ある一件の店の前にたっていた。

「ここに行けば何か分かるかもしれない。まずは情報を集めるんだ。」

一人がゆっくりとドアを開けた。

悪魔達は話すのをやめて、じつと2人を睨めつける。

黒づくめの2人はカウンターに座った。

「いらっしやい、d e b i l s b a r へようこそ。」

何本もの手足を生やしたくも男が、コップをみがきながら言った。

「ローブをぬがなくても大丈夫ですか？」

「・・・。」

2人は何もしやべらず俯いている。

「注文はあ、」

達也「コ、ココ、コーラでっ。2人とも。」

「はっはっは、さてはお客様緊張してますね。だから顔を隠してらっしゃる。」

達也（あー、早く抜け出したい。やっぱりやめればよかった。）

まばらに悪魔達は点在していて、時折大きな笑い声が響く。

すると、全身包帯づくめの男が、ナツキの隣に座った。

「やあやあ新人さんよお。一緒に飲もあや。」

達也（うつわ、またやっかいなやつが来た。）

ミイラ男は延々と自分の生い立ちや自慢話やらを繰り広げた。そしてある時、不意にナツキのフードに手をのばした。

「どれ、かわいいお顔を見しておくれ。」

「やめてください。」

ナツキがすばやく手をふりほどくと、ミイラ男はプイと奥のテーブルに戻った。

店内に鳴り響くジャズソングが、大人の雰囲気かもを醸し出す。

達也の頭は、すぐにでもここを立ち去りたい気持ちでいっぱいだった。

「君…。」

達也はフードの下から声の方をのぞく。

そこにはなんと、自分らと同じローブを着た者がいたのだ。

「君らあ、人間だよな。」

戦慄が瞬時に爆走する。

度肝を抜かれて、達也は凍り付いた。

そして男は勘定を済ますと、達也達の手を引っ張って店を出る。

「なにをするんだ！」

男はフードをまくってみせた。

「僕も、人間なんだ…。」

？一同はひとまず家に集まった。

おじさん「いやー、こんなに生存者に出会えるとは。あ、私の名前は山田重五郎^{しやうごろう}。」

達也は今までのいきさつ、旅の目的を話した。

「そうか、君たちは悪魔と戦うつもりなのか…。」

会話がやむ。

「まあ、こっちは人間だからねー。そうだ、あれだ。あそこがある。」

おじさんの話では、この町の森を抜けた砂漠に伝説の遺跡があり、その最深部にたどり着くととてもない力が手に入るといふ。

達也「どうしてそんな事を？」

「あ、ああ私は考古学者なんだ。」

それから、就床の時がやってきた。

「出発は明日の夜。それじゃ、皆おやすみ。」

皆、床についた途端に熟睡していった。

13話 雨の森

洞窟の天井からいつてきの雫が落ちる。

その音と共に、バサバサとコウモリが乱れ飛ぶ。

「サタン様、ご報告に参りました。」

マルクスが跪ひざまずいて言った。

「近々、相次いで悪魔が襲われる事件が起こっています。そしてある現場付近では黒いローブを着た連中が目撃されています。」

（なんと、黒いローブは我らの悪魔族の伝統ある衣装。ギガントとマリーの報告も考慮に入れて、人間、もしくは裏切り者の仕業か…。）

？時刻は正午。

「兄貴、メシ食わないんすか。」

「今は食う気分じゃないんだ。」

ベッドに仰向けになる僕の傍で食料をほおぼるリゲルとシチ。

ナツキはせつせと腕立てふせをして、おじさんは窓の外を眺める。

達也（遺跡の事は信じがたい。でももしそこに可能性があるかもしれないならその希望にたくすしかないか…。）

「みんなで、みんなで力を合わせるんだ。」

おじさんが外をみつめながらぼそっとつぶやく。

透き通っていた空には、どんよりとした暗雲が垂れ込めてきていた。

？時刻は深夜。

一件の家のドアが開く。

人目を忍びつつ、こっそりと3人は出てきた。

布の上を、無数の水の玉がはじけて踊っている。

「いやー、ちようどかさが3本あってよかった。」

黒づくめの3人は、ふりしきる大雨をきって進む。

通り過ぎる家からは、なごやかな笑い声が時折聞こえてきた。

上天から降り注ぐ冷雨は、地面へと吸い込まれる。
それが、煉瓦れんがの道に、無数の波紋をつくった。

「兄貴、いつまでここにいればいいです。」
達也ふたなりの懷から声がする。

「森についたらね。見つかったら終わりだから。」

雨に見張られつつ一同は歩いた。

「あ。」

いかめしく立ち並ぶ木々達が、達也の前に姿を現したのだ。

おじさん「ふう、やっとついたね。」

ついたまもなく、今度は森の中へと入っていった。

達也のロープからリゲルが飛び出す。

「達也君、懐中電灯を。」

「あ、はい。」

「よし、じゃあもう遅いし今夜は適当な場所を見つけて休もう。」

と、おじさんが言った。

シチもナツキもロープから抜け出して、再び歩き始める。

静寂。

それを暗黒のベールが覆い隠す。

泥と落ち葉を踏みしめる音と、雨と葉の旋律だけが聞こえてくる。

一同は達也の持つ懐中電灯だけを頼りに進む。

達也（なんだろうか、この不気味な圧迫感。ああ、それにしても早く休みたい。）

暗緑の樹木を行く事30分。

木の群れはいったん後方に取り残されて、そこからは広場になって

いた。

その中央には大樹が生えている。

一同は大樹の下でくつろぐ事にした。

ある者は棒になった足を屈伸させて、ある者は天に向けて腕を伸ばす。

「ん？」

ナツキは根っこの近くに刻まれた一つの足跡に気づいた。
（オオカミ？ いやでも2本だし。それにオオカミよりずっと大きい
……。）

「ナツキ、もう寝るよー。」

「あ、うん。」

ナツキと2匹は達也のリュックにあった毛布を羽織って、他は地べたに寝そべった。

達也「ああ、お家のベッドが恋しいよ。」

次第に一人、また一人と目をつむった。

皆が眠りについたあと、どこからか物音が聞こえてくる。
茂みの中に、ぴかっと光る2つの眼があった。

14話 緑髪と森の猛者

いつものように重いまぶたをこじあけた。
雨はもうすっかりやんでいる。

根っこの部分を下に寝たせいか、背中がいたい。

それをわずらしく思いながら、皆をおこした。

「おはよう、達也君。ゆっくり寝れたかい？」

「あんまり。」

素敵な朝日に迎えられて、なんて事はなく、中は朝でもほの暗かった。

僕は朝食を用意するために、リュックを探す。

あれ、ない。

「ナツキー、リュックは？」

「ふあゝ、知らない。」

皆でくまなく探しまわった。

「ちくしょう、オオカミにでもとられたのか！」
リゲル「兄貴い。」

見るとシチが指差している。

地面に落ちたバスケットを。

？「しーっ。。」

達也達は草むらに潜んで息を殺す。

感覚をあけて落ちていたお菓子辿ってここについたのだ。

切り株に腰を据えた人物は緑髪で、無我夢中で食事にがつついていた。
た。

「あつたまにきた。」

「ちょ、ちよっとダメだつて。」

ナツキがずかずかと近づいていく。

「あんたねえ。」

と瞬間その男は飛躍して、白銀のつるぎがナツキの前に突き刺さる。
その少年は騎士団の制服のような格好をしていた。

「来たな、化け物どもめ。やつざきにしてくれる!」

男は敵意をむき出しにして剣を振り回す。

「待ってくれ、僕達は人間だ。」

達也が止めに入る。

「もうこの世の中に人間なんていねえーんだよ!」

剣が振りかざされたまま止まっている。

大きな影が彼を覆ったからである。

達也は瞬時に上を向く。

手足がなく、ちっちゃい舌をのぞかせ、しっぽをくねくねうねらせ
た生命体。

言葉を失っている間に、大蛇は襲いかかってきた。
3人は間一髪でかわし、蛇の顎が地面を撃砕する。

いちもくさんで猛ダツシュ。

隠れていた3人もつられて駆け出す。

木と木の間を一心不乱にすり抜ける。

「どうするんだ！」

と、謎の少年。

達也「分からないっ。」

後ろからは大蛇が、すさまじい迫力で地を這い進んできている。

全員が力の限り走って、ある時達也は足をぴたつと止めた。

「まいたみたいね。」

周囲を確認すると、一時の安心がその場に流れた。

「ぜ、全員いるね……。」

おじさんは息を切らしながら言った。

「とりあえずこつからどうしようか。」

達也（なんか、自然とおじさんがリーダーみたいになってるな。）

ナツキが口を開く。

「作戦があるわ。」

？ナツキの話では、その作戦には一人おとりが要るようだ。

ナツキ「だれになる？」

ほんの一瞬、ナツキの瞳と目が合ってしまった。

（えー、僕がならなくても誰かなるんじゃない…。おじさんあたりが妥当だよな。

ああでもナツキにいい所をとられっぱなしだもんな…。でも怖いしな。）

「よし、ここは最年長の私がやろう。」

達也は心の隅でにんまり笑った。

「で、その作戦はというと…。」

？からすの群れがそよ風に揺られて飛んでいる。
甲高い鳴き声が、暗く閉ざされた森に木霊こだました。

何か巨大なものが枯れ葉を掻き分ける音。

すると突然すごい音をたてて、一本の木がくずれた。
それから次から次へとなぎ倒されていく。

ある地点で音の主は止まった。

「はーん。」

その前でおじさんが硬直して立ちすくんでいる。

「いるのは分かってる。」

ナツキは想定外の言葉に息をのむ。

「おおかた気をとられている内に後からやるシナリオなんだろう？
だがそれはオレ様には通用しない。一瞬早くこの老いぼれの首を噛
みちぎって、そしてしっばで後ろの奴の頬をぶってやろう。」

大蛇は不気味に笑って、そう言い捨てた。

あたりに緊迫した空気が流れる。

息苦しい沈黙が続く。

その時、おじさんの体は無意識に動いて、音が出る。

リゲル（もしかして、アイツ…！？）

ぎちぎちの風船は破裂して、瞬時に大蛇が強襲した。

おじさんはかろうじてよけたが、地面がこっぴ微塵になる事は無か
った。

達也「やったか。」

茂みから次々に人影が現れる。

大蛇はぴくりとも動かない。

何故なら、地面に突き刺さった剣が顎を貫いていたからである。

重圧から解放されて、それぞれ一息ついた。

（助かった。）

達也はただ一人でに拍動する鼓動を感じている。

「もうこりこり。」

ナツキはぐったりと尻餅をつく。

「君のおかげだよ。」
と、おじさん。

わずかな休息を取り、夕方なのでもう少し歩いて寢床を見つける事に決まった。

「て、なんであんたまでついてくるのよ。」

「ま、人間ていうのは確からしいし、それに剣という武器を持ったこのオレ様が仲間になってやってもいいと言ってるんだぜ。」

「まあまあナツキくん。今や仲間は一人でも多い方が助かる。それに、剣は武器になる。」

まだぬかるみを湛えた土を踏みならしてゆく。

だがしばらく歩いていると、おじさんは静止する。

「その前に、ここはどこだ？」

一同は必死に走り続ける内に、自分達がどこにいるかも分からない所に来ていたのだ。

「どうやら少々やっかいな土地に迷子になったようね。」

15話 静寂の守護神

達也（体が重い…。ここんところ歩きっぱなしだったしな。）

前まであったわずかな明るさも消え失せ、一同は闇の中をただ黙々と歩いていた。

「そういえば、あの一つ目がギガントとマリーがサタンにチクったって言うたな。これからはもっと用心しないと。」

「そうでげすね…。」

「どうしたリゲ、疲れたか？」

「いや実はあの蛇、バジリスクといってあつしの友達だったげすよ。」

「友達！？」

皆立ち止まって3人が声をあげる。

「いいんでげす、兄貴達のせいじゃありませんから。気づいたときにはもう遅かったですし。」

リゲルは遠い昔の記憶を思い出していた。

「小六くらいの男と女、そしてチビ二匹と老いぼれ。よくこんなメソツで生き残れたな。」

「あんたねー、よくも私達の朝メシとってくれたわね。」

達也が反論する前に、後方にいたナツキが緑髪につかみかかった。

達也「あ、そういえば君 名前は？」

「だれがお前達のような平民に教えるか。」

「なんですってえー…。」

激昂するナツキを尻目に一同は足を動かし始めた。

懐中電灯のほのかな微光が闇を掻き分ける。

「ところで何でお前らは黒服なんだ？」

「ああ、これはどうやら悪魔族が着る服で、僕らはこれでカモフラージュしてきたのさ。」

「あ、悪魔！？そういえばまだ何でお前ラバ化け物と2匹とつるんでるのか聞いてなかつ…。」

突如として、視界は闇に閉ざされる。

「ギャー、怖いー。兄貴ー！」

「だー！つるさいな。さっきの落ち込みようはどうしたんだ？」

ライトの電源が切れ、一同はその場で眠る事になった。

「ふう、オレ様がこんな所で寝ることになるとは。」

おじさん「それじゃあ皆、おやすみ。」

？音も無い、風一つ吹かない森の中。

ナツキは何とな寝付けず、ずっと上の方にやっと見える夜空を見上げていた。

「父さん…。」

これから先への不安。

それに、暗黒が作りだす恐怖の渦とがごっちゃになり、ぐちゃぐちゃにかき混ぜられてゆく。

「ぶわ〜ん。」

何かが、ナツキの顔の上を通り過ぎた。

すぐ立ち上がって周りを見回すと、一つの小さな光の玉が空を漂っている。

（何あれ…。）

ナツキは吸い寄せられるかのように歩き始めた。

それは優しい光をまとして、ゆらゆらとナツキを導いていく。

途中なだらかな坂を下ると、一気に光の玉は速度を速める。

ナツキも急いで後を追う。

が、ナツキは寸での所で足をつまらせた。

そこに、大きな湖が広がっていたからだ。

「きれい。」

あたりはびっしり光の玉で満ち溢れ、水面は金色に染まっていた。

ふと向こう岸に、影が見えた。

それはゆっくりとこつちへ向かってきている。

光が影をなではじめる。

（え？）

その者は全身を光の玉で包まれ、水の上を歩いていた。

いよいよ全身が照らし出される。

（シ、シカ？トナカイツ…！？）

ナツキは逃げ出したくもなかったが、神秘的な力に魅せられ、そうはしなかった。

その者がナツキの元にたどり着く。

「私は森の守り神、スサノオだ。」

「……。」

「君達にはとても感謝している。お礼に砂漠までのせて行って差し上げよう。」

「えっ、何でその事をつ。」

「もう皆ついたようだ。」

四方の茂みからスサノオより少し小さいトナカイが3頭が出てきて、その背中には達也達がのっていた。

？「うわ、くすぐつたいな。」

スサノオ「はは、その子達はシャイニングピクシー、光の妖精さ。」

煌めく閃光にかこまれながら列は進む。

達也とナツキ以外はすっかり眠っている。

「森に邪悪な力が潜んでるのは知っていたがうまい事逃げられ、あの蛇には困り果てていたんだ。」

「今や世界は悪魔に支配されてて、僕たちは…。」

「知っているよ。世界の事も、君達が何でここに来たのかもおみとおしさ。」

達也は急に眠気が差して、うとうとしはじめる。

「はは、いいんだよ寝て。明日の朝にはつくはずだ。」

それを聞いて達也もなんだかホッとして目をつむった。

？「ん…。」

ほっぺに当たる熱い感覚で目が覚める。

起き上がってみるとそこには馬鹿でかい砂漠が広がっていた。

16話 灼熱デザート

太陽はギラリと目を光らせて、これでもかと言わんばかりに炎をまき散らす。

3人はここなら安全という事でロープを脱いで歩いていた。

「ケツ、どうせなら遺跡まで連れてってくれりゃー良かったのに。」

焼け付くような日照り。

しみでる汗。

「の、のどがかわいた。」

「だらしないな。」

「お前がさっき全部飲んだせいだよ！」

達也はおじさんの水筒を分けてもらった。

砂丘を超えても、広がるのは砂の世界ばかり。

達也は高熱の砂を踏むたび、労力と水分が削り取られるように感じた。

生ぬるく乾いた風が吹きすさぶ。

ふと顔をあげる。

達也の瞳は、一件の建物が揺らめく陽炎かげろうの中にあるのを認めた。

「みんなもう少しだ、頑張ろう。」

全員が残った力を振り絞って歩き続けた。

？「もうダメでげすうー。」

「あー、疲れたぜ。」

緑髪は遺跡の壁にもたれこむ。

遺跡は広々とした長方形で、平べったく石組みで出来ていた。

「た、達也君、くつろぎタイムといきたい所だがここは暑い。休むなら遺跡の中で休もう。」

「そうですね。」

一同はアーチ状の穴をくぐった。

中に入ると、壁に両側にとりつけられた炎がめらめらと燃えている。

それぞれが、体から一気に力が抜けたように腰をおとす。

「ここにはありとあらゆる罠が仕掛けられ、そしてその試練の果てに最新部にたどり着けるのは心正しき勇者のみといわれている。」

「へー…。」

振動。

ズシンという音がして、とっさにナツキが飛び上がる。

振り向くか振り向かないかの内に皆が走り出した。

どでかい球体がすごいスピードで彼らを追いかけていた。

緑髪「さっそくかよっ！」

「こんなところでペシヤンコは嫌でげすー！」

達也（なんてこった。こっちはまだろくに休んでもないのに。クソッ、どうすれば…。）

球はもうすぐそこまできている。

おじさん「皆、あきらめるんじゃない。この遺跡は今までもずっと勇者を待ち続けてきたんだ。必ず突破口はある！」

（突破口、突破口…！）

「皆、僕に続け！」

ジャンプしたかと思うと、達也の体は忽然と地面に消えた。

17話 複雑怪奇のラビリンス

達也に続いて皆も穴をすり抜けていった。
球の転がる音がだんだん遠のいていく。

「あそこだけ明らかに他と色と違ったんだ。もうここしかないと思
つて。」

「ふん、お前がここで休もうと言わなきゃこんな事には…。」

「おいおい、少しは感謝してもいいんじゃないかな。」

「今は喧嘩してる場合じゃないでしょ、ほら。」

ナツキの前にはドアが一つ、その前に立て札が置いてあった。

おじさん「なになに、これを読んでる者がいるという事は、力や宝
なの私利私欲が目的か、またはその力が必要な時がやってきたとい
う事か。それはともかく、この扉の先には果てしない迷路が広がっ
ている。」

そこには様々なアイテムがちりばめられており、それはこの遺跡の
最深部までの強力な助けとなるであろう。」

と、たてふだには書かれてある。

「よ、よし皆、これから先は何があるか分からない。用心してかか
ろう。」

達也が緊迫したおももちでドアを開けると、高い壁に隔てられた一

本の道が姿を現した。

そこを突き当たると今度は左右に分かれている。

おじさん「多数決で決めよう。」

リゲルを除いた全員が右だったためそちらに進む。

するとその先は行き止まりの小さな部屋になっていて、その中央に宝箱が一つ置いてあった。

「よっしゃー、さっそくゲットだ。」

と言って達也が開けるいなや、黒いかたまりのようなものが箱の中から飛び出してきたではないか。

瞬時に何かがそれに突き刺さると黒い物体はパンツ、とはじけて消えてしまった。

達也が目を開けると宝箱に剣が突き刺さっている。

「これで借りは返したぜ。」

そういつて緑髪は剣を抜き取った。

おじさん「人食い箱か。でもどうしよう、ここは行き止まりだ。引き返すかい？」

「何かしらコレ。」

皆がナツキの方によると、床にうつすら光を放つ二重丸の模様があ

る。

「なんですね、コレは。」

「うわっ。」

いきなりシチの姿が消えたのだ。

「これはきっとワープ装置だ！」

慌てて達也も光る二重丸を踏みつける。

プワンという音になるとすぐに別世界になり、そこにシチがいた。

「よかった。」

後を追ってナツキ達も順々に出てきた。

「まったく世話をかせやがって。もいオレはがまんできん！」

「まて緑髪はぐれちゃダメだ！」

「うるさい、オレが一番強い武器をゲット……！」

駆け出したかと思うと、急に地面がウィーンと開いて、緑髪は闇の
中に落ちていった。

「緑髪ー！」

「残念だ……。」

達也は内心ざまあみると思わなくもなかった。

？ 穴をまたいで再び歩いてゆく。

お次は通路に1つ宝箱があった。

「よし、今度は用心してあげよう。みどり君がいらないから人食い箱
だったら走って逃げるんだ。」

「いっておじさんが慎重に開けると、

「……。」

「いこいこ。」

中には何も入ってなかった。

皆はスタスタと空の宝箱を踏み越えていった。

それから幾多の道をゆき、なんども角をまがり、
盾を3つ、剣、弓、ヌンチャクと次々に獲得していった。

「お、これは杖だ。」

「よしここでいったん役割分担をしておこう。」

おじさんが弓、ナツキがヌンチャクで剣と杖が達也になった。

道にちらばる毒の斑点はんとんをよけて、炎吹き出る道を飛び越えていく。

「なんだこれ、マジックドリンク？」

「たぶんそれはMPを回復するやつね。」

「種だ。」

「ほらよくある攻撃力とか守備力を少しアップさせるやつじゃない
かな。」

（なんかゲームみたいでなめてるなあ…あ。）

「そついえばナツキどこいった。」

すると後ろの曲がり角からナツキが出てきた。

「なーんだいたの…。」

達也、という声がそれをさえぎる。

「私、バランスを崩して、それで毒を…。」

「ええ!？」

よく見ると顔も青白く、汗もびっしょりかいていた。

達也は予期せぬ事態の連続に、ただただ困惑する。

18話 突破口

「ナツキ、大丈夫？」

「う、うん、なんとか…。」

5人はまた迷路を歩き続ける。

（やばい。

やばいやばいやばい。

緑髪に続いてナツキまで。

どうしたらいいんだ！

もしもの事があつたりしたらおばあちゃんに合わせる顔がない！）

こくこくと進む時間。

それとは反対に歩きたんびに一同の体力はすり減ってゆく。

体力の消耗がさらに氣力をめいらせ、きりがない迷路へのもどかしさが鬱積する。

「ちくしょう！もうお手上げた。角を曲がっても曲がっても道ばかり、これじゃきりがないよ！」

「兄貴、アレ。」

ぽつーんと宝箱が1つ、そして道は行き止まりだった。それに駆けつけてババツと宝を開け、達也は一枚の紙切れを取り出した。

「こ、これは…地図!」

「おお!」

地図には迷路の図はもちろん全ての宝箱、ワープ装置の位置が標されていた。

「ふむ、ワープ装置にはそれぞれ番号がつけられている。これは恐らくどこからどこへワープするのを標している。」

「となると僕たちはすでに全てのワープ装置を使っている。」

（さてよ、まだ通っていない道も宝箱もあるがそこから出口に通じる者は書いてないし、恐らくないだろう。という事は…）

「落とし穴!」

おじさんと達也が声を合わせて叫ぶ。

「達也君、出口となるものはもう落とし穴しか地図には標されていない。あれが、あの落とし穴こそが突破口への鍵だったんだよ!」

地図の助けもあって、以前よりも速いペースでワープを繰り返してゆく。

「よし、やっと人食い箱のここまできた。ナツキ、ほら。」

達也はおんぶの体勢になった。

「ありがとう。」

最後のワープを終えると猛ダッシュ。

「うおおお!」

（もう少し、もう少しだナツキ！もうちょっとふんばってくれ！）

そしてようやくたどりつく。

文目あやめも分かぬ漆黒が、達也達を誘うかのようにして開いていた。

（ここに行くことが本当に正しいのか。緑髪は生きているかな。次はボスか？それとも…。）

「よし！」

達也は気合いを入れて穴に飛び込んだ。

すかさずナツキ達も降り立つとすぐに達也が前方の光景に釘付けになっっている事に気づいた。

達也「これは…。」

いくつもの細長い槍やりのような物が壁から伸び壁へと横に突き刺さっていたのだ。

「これはよくあるオーソドックスな罠だね。」

「だけでもう突き刺さっているという事は誰かが通ったという事。つまり緑髪がいるかもしれないという事だ。」

そんな会話をしながら一同は槍と槍の間を縫っていく。

お次は針の道。

いくつもの鋭利な針達がピカリと待ち構えている。

（くそっ、これはジャンプじゃわたれない。緑髪はどうやって…。）

そんな達也のくよくよした考えをリゲルの声が打ち消した。

「そうか、ここを渡ればいいのか！」

壁と道との間の細い淵ふちの部分で足場にして渡っていった。

「怪しいな…アレ。」

「ビームみたいなのが出そうでげす。」

小さい砲台のような物が地面から顔を除かせている。

達也とおじさんは背中にかけていた盾をジャキンと構えた。

「ナツキは僕の後ろについてきて。」

「後ろ？なめないでよ。」

すると突然ナツキが砲台の方へ飛びかかったではないか。

瞬時に放たれる緑色の光線を鮮やかに交わすと、あっという間に砲台の向う側についていた。

「す、すごい…。」

あとの2人と二匹も盾を使って追いつき、はしご階段を降りると、

「ふうー、やっとご到着か。まったくぜー。」

「緑髪！」

「ここはどうにも俺だけで行く訳にはいかないみたいだったしな。」

ほら、こつから先の天井だけでっばてるだろ。おそらくコレは天井が徐々に落ちてくる罠だ。ま、感^{かん}ってやつさ。」

「で、どうする？」

「そりゃあ、まっしぐらさ。」

すーっと息を吸ってため息をはく。

そしてよいいドンでいっせいに走り出した。

それと同時にウィーンと上から音がし、天井が迫り始める。

「やっぱり思った通りだ！」

「がんばれ、もうすぐだ！」

（目の前にはもうすぐ近くドアがある。もう少しだ！）

達也とシチ以外はもう着いて、ドアの所から見守っていた。

天井が頭上すれすれまで来た時、達也はスライディングを決めて皆の元にたどりつく。

「シチー！」

シチはてくてくと走っていたが到底間に合いそうにない。

「ちくしょう！」

「達也君ダメだ、いっちゃ！」

達也はおじさんの手を振りほどくと背中^{うしろ}に手を伸ばし、盾を天井と壁の間に挟^{はさ}ませた。

「そうか、そういう事か！」

盾はミシミシと今にも潰れそうである。

なんとかシチ引き上げて、ドアを開けて行く。

天井は盾をグシャツと割り、そしてズシンと重たい音を響かせた。

19話 ドラゴンの間

「うわっ…！」

緑髪のを慌てて達也がおさえる。

入った瞬間真っ先に目に飛び込んできたもの。

それは巨大で、たくましく、むくむくと赤い毛で覆われそして2つの翼を生やした生物。

ドラゴンだった。

ドラゴンは手首足首4本の鎖で大きないびきをかいてまどろんでいる。

「おいおいマジかよ。」

と緑髪が小声で言う。

辺りは体育館くらいの広さで、そこら中宝石や金貨の山が積み重なっている。

おじさんがドラゴンの後ろにドアが1つある事に気付いた。

「よし、きつとあれがゴールだ。気付かなければ戦わずに済むぞ。」

ぬき足さし足、慎重に忍び寄っていく。

（たのむ！神様。このまま何事もなく、このまま何事もなく。）

「ガチャッ。」

電光石火のごとく全員が音の主の方を振り向く。

緑髪が、ドラゴンの鎖をふんでいた。

恐る恐る上を見上げると…

瞳が、開いていた。

突如、凄まじい衝撃はが一同を吹き飛ばす。

おじさん「み、みんなっ！大丈夫か！？」

「グフ、グフフフ…。」

地面に当たったドラゴンの手の所からプシューと煙が出ている。

「ようこそ、ドラゴンの間へ。オレはスーパードラゴン。気付かれずに行こうとしたようだが残念だったな。」

「ここを通してくれ！僕達は君と戦いたくない。」

「ほう…そいつは」

うつすら笑みを浮かべて、

「無理な話だ！」

ドラゴンが引っ掻いてきたのでかろうじてよける。

「おじさんは弓で遠くから射撃して下さい！リゲルとシチはアイテムで補助してくれ、それとナツキは休んで！」

「休む！？冗談じゃないわよ。」

そう言つてナツキはヌンチャクは手に走り出す。

「まったく…あ、緑髪コレ！」

達也は持っていた剣を渡した。

「ふ、これで二刀流つてやつか。暴れてやるぜー！」
緑髪もドラゴンめがけて駆け出した。

（よし、僕もこの杖で…。だけどコレどうやって使えばいいんだ？）

2人はドラゴンの足下にたどりつき、剣で切り刻み、ヌンチャクで殴りつける。

「ンアア？ちょこまかとうざったいんじゃないー！」

「ぐわっ！」

2人は足で蹴り飛ばされた。

「テメーらの相手はコイツらだ。」

ドラゴンは深呼吸をして反り返る。

そして大きく口を開けて何かを吐き出した。

「うわっ、何だコイツら。」

そこには剣を持ったがいこつが何体もいた。

とその時、一体のがいこつがいきなり達也に飛びかかった。

「ぐ…なんだコイツ。」

達也は押し倒され、杖を横にして剣を防ぐ。

（くそつ、力が強い…！）

その瞬間がいこつの力は、ドサツと転げ落ちる。

「おじさん！」

遠い所からおじさんが弓でうつてくれたのだった。

「おじさんとナツキはがいこつ達を、僕達はドラゴンをやります。」

残り2つの盾の1つはおじさん、そしてもう1つこっちサイドで達也になった。

達也はリゲルから投げられた盾を受け取ると、はやぶさのごとくドラゴンの元へ駆け出した。

「ふん、かってにしきりやがって。いつとくが俺は俺のために戦うんだからな！」

「グフフフ！^{あり}蟻が恐竜に勝てるでもいうのか。」

（よし、この杖。使い方が分からないけど実践あるのみだ！）

「うりゃー、出るー！」

杖は振りかざされても何の変化も無い。

そのままドラゴンのしっぽではじかれてしまった。

（ぐ、なんとか盾で防いだけど…なんて威力だ。）

「はっ、情けねー！」

手慣れた手つきで緑髪がガリガリと足の肉に斬りつけている。

「地味にイテーんだよっ！」

またもや足蹴あしげにされ、緑髪は宙に浮いていた。

「緑髪ー！ちくしょあー！」

達也もまたドラゴンに立ち向かっていった。

？ 一方ナツキ達は。

朦朧もうちろうした意識の中ただ迫り来る敵達をなぎ倒す。

皆には心配かけないようにこうして強がってるけど、もう体力の限界かも…。

ふと油断していると、横からの攻撃に気付く。

ああ、間に合わないっ！

ピシュン！と何かがガイコツごと突き抜けた。

「ナツキくん！こんな所で負けてはいけない。君には世界を取り戻す目的があるんだ。」

見るとおじさんが凜として弓を構えていた。

「はいっ！」

？「大丈夫か！緑髪、オイ！」

緑髪はすでにもうボロボロで、傷だらけだった。

（そうか、僕達は超能力者でも魔法使いでもなくて、ただの人間なんだ。その僕らがあんな化け物と…。）

「緑髪はここで休んでて、ただでさえ盾がないんだから。」

「ふざ…けんな…グッ。」

達也が緑髪を安全な場所へと運ぼうとしたその瞬間、

「あちちちち！」

熱くメラメラしたものが達也の背中を焦がした。

「くそっ、火も使えるってのか。リゲルー！こいつを運んでやってくれ。」

「あいよ！」

達也はまた再び敵めがけて走り出す。

「はっ、こりない奴だな。どうだオレのファイヤーブレスと勝負するかあ？」

ドラゴンは鼻から息をスーッと吸い込みだした。

（こつなりやヤケだ、出る、出る出る出る！！）

すると、杖の先端は急に微かな光を放ち始めたのだった。

20話 ドラゴンの間 ? 血戦

おぼろげな光は徐々に膨張し、そしてまばゆい程の光の筋となる。それは燃えさかる炎の渦をも貫き、ドラゴンの大口に入って閃光と爆発音が一体を包んだ。

「な、なにが起こったげす?」

次第に各々の視力が元に戻ってくる。

「僕がやったのか…?」

「やったでげすよ兄貴!」

ドラゴンの口はあんぐり開いたままで、ふかふかと煙をふかしていた。

「ふん、これで少しは楽しめそうだな。
と、ドラゴンは言い放った。

(この杖、多分…。)

互いが見つめ合ったまま、様子をさぐりあう。

ただならぬ空気。

離れた所ではナツキ達が戦う音がしてくる。

先に動いたのはドラゴン。

鋭く尖った爪が次々に襲い来る。

懐にもぐりこみ、腹に標準を定める。

「甘い！」

ドラゴン今までたたんでいた翼を広げ突風を巻き起こす。
達也は回転しながら宝石の山を散らかす。

「何っ…！？」

舞い上がる宝石の中にも手の中にも達也の姿はない。

ピカッと稲光がすると共に、ドラゴンに痛みが走る。
なんとドラゴンの横に達也がいたのだ。

「先回り作戦！」

？「お前が山を壊す前に裏側からすばやく移動してたのさ。」

「ごさかしいマネをしゃがってえ！」

それから達也かと白熱した激闘を繰り広げた。

引つ掻きをよけて、しっぽのムチをかわし、翼の突風をかわして紅蓮の炎を防いだ。

緑髪はリゲルとシチいる離れた所から達也の熱戦を見やっていた。

（おかしい。達也はあれから何回も攻を食らわしているが、ドラゴンには疲労の様子が全く見えない。
それどころか翼の1つも壊せてない。）

その時、

「達也、そいつは倒せない！だって考えてみる、かなりの数のぶちこんでもそいつはピンとしてる、剣、弓、ヌンチャクでも同じだろう。だがこの遺跡がゴール出来るように造られているなら、なにかドラゴンを倒す方法があるはずだ！」

と、緑髪が叫んだ。

「で、でもそんな事言っただって…」

出し抜けに、達也は何かにつまづいた。
足下には少しへこんだ四角いへこみがあったのだ。

「おらおらー！」

休む間もなく飛んでくるドラゴンの手。

すかさず避ける。

（確かにこのままやつても勝てる気がしない。なんだろう、アレは室内の真ん中にある不自然なくぼみ…。ハッ、もしかしてゲームでよくある何かをはめて何かが起きるしかけ！まさか…！）

「グフ、やっと石盤に気付いたようだな。石盤は迷路の中にある。なんなら今取りい行ってもいいんだぞ。」

「嘘じゃないだろうな。」

「グフフ、オレは嘘はつかない。」

「リゲル頼みがある！今から迷路に戻って石盤を取ってきて欲しい。」

「

「達也君、何でまた石盤なんだい？」

遠くの方からおじさんが弓を撃ちながら尋ねた。

「さつき部屋の真ん中に不自然なへこみがって、ドラゴンの話では迷路の中に石盤があるらしんです。

それをはめたら何か起きるのかなって。」

それを聞いておじさんは早足でリゲルの元へと駆けつける。

そしてつくやいなや何やらリュックの中をさぐりはじめる。

パパッと鉛筆で紙切れになぐり書きすると、

「はい、リゲル君。地図にまだとってない宝箱に印をつけておいた。あとそれから……。」

おじさんはリュックから何十にもとぐろを巻いた物体をとりだす。

「このロープ使えば迷わず帰って来れるだろう。迷路で手に入れたんだ。見つけたらぐいつとひっぱればいい。」

「ありがとうでげす、おじさん！」

リゲルはロープの先端と地図を口でくわえて、ドアの方へと走っていった。

達也「頼んだぞー、リゲル！」

？ナツキの所のがいこつ達はあと残り数体である。
緑髪はシチのいる方へと走り出す。

「グフフ！作戦会議はもういいのかぁ！？」

ドラゴンが鬼の形相で噛みつきにかかる。

（うつ、まに合わない…！）

だが疾速する何かがドラゴンの顎をきりさいた。

「緑髪！」

「ゼエ…ゼエ…あのチビに回復薬をもらったのさ。」

ドラゴンは大声で悲鳴をあげている。

それは尋常ではなく、まるで断末魔のようである。

「てめーら…ゆるさんぞおお！」

ぶち、ぶちぶちつと鎖がはずれていく。

「なあ、これって竜の逆鱗げきりんに触れるやつか…？」

「多分…」

突如、逆巻く炎のプレスが彼らを襲う。

（ちくしょう！リゲル、はやくきてくれっ。）

？ ロープのとぐろは、上の方からシュルシュルとすごい速さですり減っている。

その頃リゲルはというと…

俊足で駆け抜け、もう針の道に差し掛かっている。

（へへ、こんなに思いつきり走るのは兄貴と出会った頃以来です。

ゝ

そして針の道をぴよんと飛び越えていった。

21話 ドラゴンの間 ? 出るおおおおお!!

? スパンと一本の矢が真っ白な額に貫通した。

「お、終わった…。」

ナツキはその場にへなへたと倒れ込む。

「よく頑張ったね、ナツキくん。それじゃ私はあっちの加勢に行ってくるよ、君は休んでなさい。」

「いや、私も…行きます。」

「いや君は休むんだ。むしろ君には役割がある。リゲル君が石盤を見つけたらロープぐいっとする合図があるはずだ。そしたらロープ思いっきり引っ張るんだ。これは急がないとリゲル君がつぶされちゃうからね。」

ナツキを説得するとおじさんも達也達と合流した。

「ここからは私も戦うよ。」

「助かります。あいつは緑髪が逆鱗にますます強くなって…。」

といってる最中にもドラゴンは引っ掻いてくる。
それをよけても手首についた鎖の二段攻撃。

「うおおおお！」

と唸りつつ、翼で風を起こしつつ、しっぽと引っ掻きを織り交ぜ、火を吐いてくる。

「くっ、近づきさえできんっ！」

「うおー！なめんな！僕はサッカーやってたから足には自信があるんだ！」

と、達也が襲いかかってきた手の上をどんどんとよじのぼっていく。顔に剣を突き刺そうとしたたん、はたかれてしまった。

（ここにきて僕はちょっと変わり始めてるんだ。水竜の時はなにもしできなかったけど…。）

「シチ、回復薬とってくれる？」

ナツキは回復役をゴクゴク飲みながら、戦いの様子を眺める。

「ふー、ありがと、少し楽になった。にしても達也頑張ってるなあ、前はもつと臆病だったのに。」

（ああ、悔しい。皆頑張ってるのに何で私だけ…。何も出来ないのが悔しい！）

？リゲルはとうとうついに、迷路に辿り着いていた。

（ない、ないないないない！まだとつてない石盤らしきもの1つもないでゲス！ん、確かここは人食い箱のあたり…。）

通路にはすでに開いた宝箱が1つ。

「なんだ、これは何もはいつてなかったやつじゃないかー。」
少し期待しながら箱をのぞきこむ。

「ああー！やっぱ入ってないでげすー！いたいどこにあるというでげすー！」

リゲルはしびれを切らして、暴れまくった。

「ゴトツ。」

宝箱は倒れていて、床には一枚の板が落ちていた。

「そうか、底に敷き詰められていたから分からなかったんだ！」

リゲルはロープをぐいっと引っ張った。

？「遅いな、リゲル。」

「グフ、貴様らがくたばるか、あのチビ野郎がもってくるか、どっちが早いかな？」

ドラゴンと戦う3人も疲労困憊ひろつこんぱいで、度々シチから回復薬をもらいながら戦っている。

その時、

「きた、リゲルから合図！」

3人の顔にも希望の光が見えはじめる。

「よっしゃー！」

「フツ、待たせやがる。」

ナツキは力いっぱいロープをたぐりよせる。
けれどもそれを毒が邪魔する。

体中からにじむ汗で手が滑りそうになる。

（今私が頑張らないと……！これが私の出来ることなんだ！）

すると、ふと背後に気配を感じる。

「おじさん！」

一緒にになって、ひきあげていく。

その頃、リゲルはヒュンヒュンと高速ではりの道、ビームの罠とくぐり抜けていた。

いよいよ最後の罠を通り、天井が動きはじめる。

（まってでけす、もうすぐ、もうすぐ！）

ひっぱる感覚が消え、2人は反動で尻もちをつく。

ナツキが見上げるとそこにはリゲルが宙高く舞っていた。

？「ナツキー、コレ！」

リゲルは瓶のようなものを口から投げ渡した。

ナツキがそれを受け取るとそれには（毒消し薬）と書かれてあった。

「兄貴ー、石盤あつたでけすよー！」

「よし、よくやった！あとは誰かが石盤をはめるかだ。一番強力な武器を持つてる僕が援護するよ。」

カンッと瓶が投げ捨てられる。

「私がやるわ。毒もすっかりとれたしね。」

「わかった、僕も今そっち側に……」

次の瞬間ドラゴンのかぎ爪攻撃が彼を襲う。

「だれが黙ってはめさせるかぁー！」

「ぐわっ！」

達也は突き放され、ドラゴンのかぎ爪攻撃が彼を襲う。

「緑髪、悪い！」

達也は緑髪の顔を見るやいなや、また駆け出した。

（はやく……行きやがれ。いつとくが達也、オレはあくまで自分のためにやったんだからな……。）

ドラゴンは炎を吐き出す。

いくつもの火の玉が雨のように降り注いで、辺りは火の海と化す。

リゲルはナツキに石盤を渡して、達也はその後方に回り込む。

「準備はいい？ナツキ。」

「ええ。」

1、

2の、

3で飛び出した。

「本当の勇者だけがこの遺跡の最深部までいく事が出来るのだ！」

今までに無いほどの強烈な烈火の炎。

《達也、頑張つて。》

（！？なんだ今の声。ああ、今はそれどこじゃない！出る、出る出る出るおおおお！！）

輝かしい光がその場を飲み込み、ナツキの上で凄まじい爆裂音が起きる。

ナツキはそつと石盤くぼみにあてはめた。

煙霧^{えんむ}立ち上る中、目を開けると、ドラゴンの動きは止まっていた。

「止まって…るのか？」

「やっとでげすー！」

達也、シチ、リゲルは抱き合って喜ぶ。

ナツキ心のつかえがとれたように胸をなでおろした。

「さ、ここは炎に囲まれて暑いから、ひとまず次の部屋に行こうか。」

一同はドアを開けながら思いも思いのの会話にふけっている。

「リゲルよくやったなー。」

「いやいや、ナツキもものすごく頑張ってくれたでげすよ。」

「緑髪のアドバイスがないと今頃ドラゴンの胃の中だったかもしれないし、おじさんの弓もうまかつ…。」

後ろを見ると、おじさんは何やら震えながら震えながら俯いている。

「おじさん？」

「ギャハ…ギャハハハハハ！」

おじさんの体はどんどんと大きくなり始める。

22話 アベル

「こ、これって…。」

やがておじさんの体は服を破り、全身ムクムクした毛に覆われ天使のような翼が生え、顔はフクロウに変化^{へんけ}していた。

「ぎゃは…ぎゃははは！ぎゃはははははは！」

おじさん、だったその者は狂ったように笑う。

皆は呆気^{あつけ}にとられている。

「面白かったぜ？君達との”お仲間ごっこ”。」

達也 「どうゆう事だ！」

「オレはあの日偶然ローブを着てBARにいた。そこにお前達がやって来たのさ。」

しめたと思たぜ。他のやつらは分かってなかったが、オレは特別鼻がいいから分かった。

前々からこの遺跡の噂をかぎつけ、入りたいと思っていたがどうも心細くてな。

悪魔を利用すれば逆にこっちが裏切られるもしれん。

お前達を利用してサタンに突き出せば鼻が高い。そしてサタンを倒す野望に一步近づくという訳だ。

ちなみにオレの本名はアンドラスだ。演技、うまかったか？」

こらえきれず緑髪がきりかかる。

アンドラスは片手で彼を投げ飛ばし、壁に叩き付けた。

「てめえーらの相手は後でゆっくりしてやるよ。」

そういつて目の前のドアを開けていた。

が、すぐさま悲鳴のような声が聞こえてきて徐々に遠ざかっていった。

ドアがすーっと薄くなっていく。

その横に新たにドアが1つ現れた。

「なんだ？」

すると、（ようこそ、いらしゃい）という声が彼らには聞こえようなた気がした。

その声は澄んでいて、それでいて優しかった。

「なんなんだ？」

「立てる？」

達也は吸い寄せられるようにドアを開けていった。

入るとそこには真ん中に棺桶らしきものが1つ、部屋は煌めかしい宝石で溢れかえっていて、椅子に青年が座っていた。

「怖がる必要はない、皆いらつしゃい。」

青年は銀色の神をして、古びた服を着ている。

ぞろぞろと部屋に入っていく。

「あなたは？」

ナツキの問いかけも無視してその青年は話をしはじめた。

「遠い昔、およそ1000年くらい前。人々は田を耕し獣を飼って、生活を営んでいた。」

そんな時、ある日突然空から化け物が降りてきた。

人間にうつすべはなく絶望状態だった。

だがある時、私は突然不思議な力に目覚めた…。」

達也「もしや、あたなた…！」

「そう、私が悪魔を封印した男”アベル”だ。」

「やっぱり、学校で習った事があるんだ！」

「さっきの奴なら針の落とし穴に落としておいた。」

こうやって僕が見張っていれば、言い伝え通り勇者以外が辿り着く事はないってことさ。」

「な、なるほど…。」

「それはさておきよく辿り着いてくれた。僕は君達みたいな人を待っていたんだ。」

「褒美にそれぞれに合った力を与えよう。」

一同「力？」

まず最初にナツキが選ばれ、アベルの所まで進んだ。
アベルは立ち上がり、ナツキの頭にポンと手をのせた。

「ふむ、君は格闘タイプか。
ナツキはポツと頬を赤くする。

アベルは目をつむって1秒、2秒、そして5秒程たつと

「はい、もう終わり。」

「え？全然何も変わって…」

「はい次はその緑君。」

呼び名にムツとしながらも緑髪が前に進む。

「ホウ、君は剣士タイプつと。」

緑髪も先程と何も変わらず儀式を終え、達也の番がやってきた。

「どれどれ…ムム！？難しいな。ふーむコレ…。」

達也はだんだん不安な気持ちになってくる。

「分かった！きみ魔法使いだね。」

無事に儀式が終わろうとしていた矢先、鮮烈な白光はつこうが広がった。

緑髪「なんだ今のは！」

「なるほど、君には大きな力が眠っているようだね。」

だがそれを解き放つには同じくらいの力を持つほどのきつかけが必要かもしれない…。」

達也はその言葉の意味がいまいちよく分からなかった。

「あのー、あつしらは…。」

「おっとゴメンゴメン、忘れてた。こっちへおいで。」

二匹とも前へ進む。

「よし、君はこれだ。」

ボンツと小さな煙と共に現れたのは、漫画本だった。

「わーい、あつしが好きな（天使をやつつける）の最新刊です！」

達也「はは、良かったな。」

アベルははシチの儀式にとりかかる。

「んっ！？おや、君はまだこんな力を持っていたのか。でもどうやら使い方が分かってないらしい。」

シチの儀式もようやく終わった。

達也「あのー、シチに何を？」

「ん？ちよつとばかり元となる種に水をやってあげたのさ。」

「はあ…。」

「それからナツキ君と緑君、君達には武器をあげるよ。」

ナツキには鉄の棍棒^{こんぼう}、緑髪には剣が渡された。

「でもオレもう2本もってるけど…」

「いいからいいから。」

剣の絵の部分には赤い球が当てはめられていた。

「さ、僕の力をみんなにやってしまったから、もうじきここは崩れる。」

僕の最後の力を使って君達をワープさせよう。」

「崩れるって、あなたは!？」

「僕の体をよく見てごらん、だんだん透けてきてるだろう。僕はとつくに死んでいてこの棺桶の中に本物の死体がある。この体は魂の幻影なのさ。」

天井がミシミシ鳴りはじめている。

一同はアベルの指示で手をつないで、内側を向くように円になり、その真ん中にアベルが立った。

「あ、そうそう。達也に渡すものがあつたんだ。」

アベルはスツと達也のポケットに何かを入れた。

「ちえっ、お前だけズルいつつの。」

アベルは真っすぐな瞳で達也をみつめる。

その姿はどこかたくましく、威風堂々としていた。

「皆、サタンは強い。心してかかるように。それから達也、自分に勝つんだ。」

「えっ……？」

「例え、この姿が消え失せようと、魂だけはこの先もずっと砂の下で眠り続けるだろう！」

スーパーハイパーエマーゲンシーリユージョン！」

たちまち疾風が巻き起こり、彼らの体緑色に光りはじめる。

達也が最後にみたもの、それはアベルの透き通った青い目だった。

一瞬何が起こったか分からない内に、5人は暗くなった外に出ていた。

皆、口をつぐんで遠くの崩れ行く遺跡を眺めている。

達也は最後に見たアベルの瞳をまざまざと思い浮かべていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1914p/>

悪魔をやっつけろ！

2011年11月13日06時57分発行